

寝屋川市

# 梨木元遺跡

京阪本線(寝屋川市・枚方市)連続立体交差事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書

2024年8月

公益財団法人 大阪府文化財センター

寝屋川市

# 梨木元遺跡

京阪本線(寝屋川市・枚方市)連続立体交差事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書

2024年 8月

公益財団法人 大阪府文化財センター

寝屋川市

# 梨 木 元 遺 跡

京阪本線(寝屋川市・枚方市)連続立体交差事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書



# 序 文

大阪府の北東部、寝屋川市と枚方市の境に位置する京阪香里園周辺は、かつての河内国茨田郡郡村にあたり、古代茨田郡の郡衙推定地ともされる地域です。東部の枚方丘陵と西部の淀川左岸沖積地の接する付近にあって、枚方道と京阪本線が南北に通り、特に丘陵部は早くより大都市大阪近郊の住宅地として開発が進められてきました。また、古代にさかのぼる条里地割をよく残している平野部も、かつて広がっていた耕地は次第に姿を消し、現在は住宅や商業施設が立ち並ぶ景観がみられるようになりました。このような地域開発の進展とともに近年の自動車社会にあっては、道路交通の混雑緩和や、鉄道踏切における事故や渋滞の解消は喫緊の課題となってきました。大阪府と京阪電気鉄道株式会社はこのような課題の解決のため、京阪本線寝屋川市駅から枚方市駅周辺区間において、道路整備や鉄道の連続立体化事業を計画、推進しているところです。

今回発掘調査の成果を報告する梨木元遺跡は、現在の京阪本線香里園駅の北側に位置する遺跡で、南北約320m、東西約50mの範囲が周知の埋蔵文化財包蔵地とされています。上述の京阪電気鉄道京阪本線（寝屋川市・枚方市）連続立体交差事業に伴う試掘調査によって、令和元年度にあらたに発見された遺跡で、初めて本格的な発掘調査が行われることとなりました。今回は府道の移設予定地という限られた範囲の調査ではありましたが、古墳時代の須恵器を伴う溝や、鎌倉時代のものと考えられる集落遺跡の一部を確認し、この地域の人間活動が少なくとも古墳時代にまでさかのぼることがあきらかとなりました。とりわけ古墳時代の溝は小規模な方墳の痕跡と考えることができるもので、近年、寝屋川市太秦古墳群などであきらかとなった、初期群集墳にあたる可能性があります。また今回の発掘調査では、現在は市街地の地下に埋もれて見ることのできない旧地形の様子を確認することもできました。これはまさに地中に残された土地の履歴ともいえるもので、地形の変化と人々の土地利用の関係を読み解くことで、自然環境の変化に応じた人々の土地への働きかけを具体的に知ることができます。

このような調査成果のひとつひとつは衆目を集める性格のものではないかもしれませんが、その積み重ねが地域の歴史をあきらかにし、ひいてはより大きな歴史を考えていく材料ともなり得るものです。今回の調査成果が地域の歴史像や各時代の社会像をあきらかにするための一助となることを、願ってやみません。

最後になりましたが、今回の事業の実施にあたってご理解・ご協力を賜りました、大阪府枚方土木事務所、京阪電気鉄道株式会社、大阪府教育庁文化財保護課、寝屋川市教育委員会文化スポーツ室、地元関係各位に厚く御礼申し上げる次第です。今後とも大阪府文化財センターの事業により一層のご理解とご協力を賜りますよう、なにとぞよろしくお願い申し上げます。

令和6年8月

公益財団法人 大阪府文化財センター  
理事長 坂井 秀弥



# 例 言

1. 本書は、京阪本線（寝屋川市・枚方市）連続立体交差事業に伴い実施した大阪府寝屋川市梨木元遺跡の発掘調査報告書である。
2. 発掘調査と整理作業は、大阪府枚方土木事務所から委託を受け、公益財団法人大阪府文化財センターが、大阪府教育庁文化財保護課の指導のもと実施した。現地調査は令和4年9月から令和5年3月まで行い、引き続き中部調査事務所において令和5年4月から令和5年7月まで整理作業を行った。また、令和5年度に調査を実施できなかった範囲について、令和6年2月から3月まで現地調査を行い、引き続き本部事務所において令和6年4月から5月まで整理作業を行った。以上の調査成果をまとめ、令和6年8月30日に本書の刊行をもって事業を完了した。
3. 発掘調査および遺物整理作業に関する受託事業名と事業契約期間は下記の通りである。

【事業名称】京阪本線（寝屋川市・枚方市）連続立体交差事業に伴う埋蔵文化財発掘調査業務委託（その3）  
【事業契約期間】 令和4年9月1日 ～ 令和5年7月31日  
【事業名称】京阪本線（寝屋川市・枚方市）連続立体交差事業に伴う埋蔵文化財発掘調査業務委託（その5）  
【事業契約期間】 令和6年2月1日 ～ 令和6年8月30日
4. 発掘調査および遺物整理は下記の体制で実施した。

令和4年度：事務局次長 市本芳三、総務企画課長 亀井 聡、調査課長 佐伯博光、調査課長補佐 後藤信義、主査 森本 徹（調査担当）  
令和5年度：事務局次長 亀井 聡、総務企画課長 島谷美穂、調査課長 佐伯博光、調査課長補佐 後藤信義、主査 森本 徹（調査・整理担当）  
令和6年度：事務局次長 亀井 聡、総務企画課長 島谷美穂、調査課長 佐伯博光、調査課長補佐 後藤信義、主査 森本 徹（整理担当）
5. 本書に掲載した写真の撮影は、遺構は森本が、遺物はセンター写真室が行った。
6. 本書の執筆および編集は森本が行った。
7. 発掘調査ならびに報告書の作成過程において、下記の方々からご指導・ご協力を賜った。記して感謝いたします。  
山上 弘・小浜 成（大阪府教育庁文化財保護課）、野岸嘉和・丸山香代・金森あやめ（寝屋川市教育委員会文化スポーツ室）、真鍋成史（文野市教育委員会）、濱田延充（順不同、敬称略）

# 凡 例

1. 遺構図および断面図に示した標高は、東京湾平均海面（T.P.）を使用している。図中の標高は、特に記さない限りすべて東京湾平均海面（T.P.）からのプラス値であり、T.P. + は省略した。
2. 座標値は世界測地系（測地成果2011）による平面直角座標系第VI系に基づき表示している。単位はすべてmであり、mは省略した。
3. 全体図および遺構実測図の方位は、いずれも平面直角座標系第VI系の座標北を示す。なお、真北は東に $0^{\circ}16'24''$ 、磁北は真北に対し西に $7^{\circ}17'$ 傾く。
4. 現地調査および遺物整理に際しては、当センターの『遺跡調査基本マニュアル』2010 および改訂指示に準拠した。
5. 土層名については調査時に各トレンチごとに付したものを、調査終了時に統一した土層名に変換した。本書では変換後の統一の層名を用いている。原則として土壌にa層、その母材となる堆積層にも層を付して標記するが、その区分が判然としない場合や、本書の記述でその必要性が低い場合は標記を省略したものがある。
6. 土層断面図の土色は小山正忠・竹原秀雄編『新版標準土色帖』2004年度版 農林水産省農林水産技術会議事務局監修・財団法人日本色彩研究所色票監修を用いた。土層の記載方法は、記号・土色名・土質名の順とする。（例：10Y4/2 オリーブ灰 シルト）
7. 遺構番号は、トレンチごとに遺構種類に関わらず1から順に付し、遺構番号-遺構名として表現した。このため、異なるトレンチで同一の遺構番号をもつものがある。また、本文末に遺構一覧表を掲載した。
8. 全体平面図に記載した遺構番号のうち、ピットについては遺構種類を省略し、遺構番号のみとした。
9. 遺構実測図における断面位置は、図面上に「 $\blacktriangleright \blacktriangleleft$ 」によって示した。掲載縮尺は統一していない。
10. 遺物実測図の縮尺は、4分の1とした。各図面にはスケールを付しているので参照されたい。また、写真図版の遺物はスケールを統一していない。
11. 掲載遺物には通し番号を付し、本文・挿図・写真図版とも一致する。また、本文末に遺物一覧表を掲載した。なお、一覧表にのみ記載した遺物もある。掲載遺物番号は1～165である。
12. 出土遺物の年代観や器種・器形分類の大枠については、特に断りのない場合は下記の文献に依拠した。  
古墳時代須恵器：田辺昭三 1983『須恵器大成』角川書店  
古代の土器：神野 恵 2015「土器の年代と木簡の年紀」『遺跡の年代を測るものさしと奈文研』クワボロ  
平安時代・中世の土器：太宰府市教育委員会 2000『大宰府条坊跡XV』  
中世土器研究会編 1995『概説 中世の土器・陶磁器』真陽社  
日本中世土器研究会編 2022『新版 概説 中世の土器・陶磁器』真陽社
13. 引用文献および参考文献は本文末にまとめた。



# 目 次

序文・例言・凡例・目次

第1章 調査に至る経緯と調査の経過	1
第1節 調査に至る経緯	1
第2節 調査の経過	2
第2章 位置と環境	3
第1節 地理的環境	3
第2節 歴史的環境	5
第3章 調査の方法	7
第4章 調査成果	9
第1節 地形と基本層序	9
第2節 遺構と遺物	12
第1項 1トレンチ	12
第2項 2トレンチ	15
第3項 12トレンチ	19
第4項 3トレンチ	25
第5項 4トレンチ	26
第6項 5トレンチ	31
第7項 11トレンチ	35
第8項 6トレンチ	37
第9項 8トレンチ	43
第10項 9トレンチ	44
第11項 10トレンチ	45
第5章 総括	46

一覧表(1. 遺構一覧表 2. 遺物一覧表)・写真図版・抄録・奥付

## 挿 図 目 次

図1 事業計画範囲と梨木元遺跡の位置……………	1	図19 4トレンチ 平面図 遺物出土状況図 ……	27
図2 淀川南岸東部地域遺跡分布図……………	4	図20 4トレンチ 土層断面図 ……	28
図3 調査区の配置と地区割図……………	8	図21 4トレンチ 出土遺物 ……	29
図4 埋没微地形と基本層序……………	10・11	図22 5トレンチ 平面図 ……	30
図5 1トレンチ 平面図……………	13	図23 5トレンチ 土層断面図 ……	32
図6 1トレンチ 土層断面図……………	14	図24 5トレンチ 出土遺物 ……	33
図7 2トレンチ 平面図 土層断面図……………	16	図25 11トレンチ 平面図 ……	35
図8 2トレンチ 遺構平・断面図 土層断面図 ……	17	図26 11トレンチ 土層断面図 ……	36
図9 2トレンチ 遺物出土状況図……………	18	図27 11トレンチ 出土遺物 ……	36
図10 2トレンチ 出土遺物 ……	18	図28 6トレンチ 第1面 等高線図 ……	37
図11 2トレンチ・12トレンチ 古墳復元図 ……	19	図29 6トレンチ 平面図 土層断面図 ……	38
図12 12トレンチ 平面図 ……	20	図30 6トレンチ 遺構平・断面図(1) ……	39
図13 12トレンチ 土層断面図 ……	21	図31 6トレンチ 遺構平・断面図(2) ……	40
図14 12トレンチ 遺構平・断面図 ……	22	図32 6トレンチ 出土遺物 ……	42
図15 12トレンチ 出土遺物 ……	23	図33 8トレンチ 平面図 土層断面図 ……	43
図16 3トレンチ 平面図 ……	24	図34 9トレンチ 平面図 土層断面図 ……	44
図17 3トレンチ 土層断面図 ……	25	図35 10トレンチ 平面図 土層断面図 ……	45
図18 3トレンチ 出土遺物 ……	26	図36 周辺の遺跡との関係 ……	47

## 表 目 次

表1 遺構一覧表……………	51	表2 遺物一覧表……………	52
---------------	----	---------------	----

## 写 真 図 版 目 次

図版1 調査地の景観・層序		図版16 遺構 6トレンチ	
図版2 層序		図版17 遺構 6トレンチ	
図版3 遺構 1トレンチ		図版18 遺構 6トレンチ	
図版4 遺構 1トレンチ		図版19 遺構 8トレンチ・9トレンチ	
図版5 遺構 2トレンチ		図版20 遺構 9トレンチ・10トレンチ	
図版6 遺構 2トレンチ		図版21 遺物	
図版7 遺構 2トレンチ		図版22 遺物	
図版8 遺構 12トレンチ		図版23 遺物	
図版9 遺構 12トレンチ		図版24 遺物	
図版10 遺構 3トレンチ		図版25 遺物	
図版11 遺構 4トレンチ		図版26 遺物	
図版12 遺構 4トレンチ		図版27 遺物	
図版13 遺構 5トレンチ		図版28 遺物	
図版14 遺構 5トレンチ		図版29 遺物	
図版15 遺構 6トレンチ		図版30 遺物	

# 第1章 調査に至る経緯と調査の経過

## 第1節 調査に至る経緯

大阪と京都を結ぶ鉄道路線のうち、現在の京阪本線は明治43年(1910)に大阪天満橋駅と京都五条駅間に開通した路線で、かつての京街道を鉄道で直結するとともに、沿線各地域の開発に寄与する意味でも重要な役割を担っている。一方、沿線地域の人口増加や開発の進展は、自家用車の普及や自動車輸送の活発化とともに周辺道路の交通混雑や、踏切の長時間遮断による地域コミュニティの分断という状況を生み、その解消が求められている。大阪府ならびに京阪電気鉄道株式会社はその対策の一部として、枚方公園駅付近から香里園駅付近までの約5.5km間の鉄道路線の高架化や府道の整備事業を計画し、その計画路線内に分布する周知の埋蔵文化財包蔵地やその隣接地の取り扱いについて、文化財を所管する大阪府教育庁文化財保護課の間で協議が進められた。これにより令和元年(2019)5月17日付で、大阪府教育委員会、大阪府、京阪電気鉄道株式会社、ならびに公益財団法人大阪府文化財センターは協定書を締結し、同年11月より試掘・確認調査を実施し、その結果により本調査が必要とされた範囲については、建設工事に先立つ埋蔵文化財の発掘調査を順次、実施することとなった。試掘・確認調査では枚方市伊加賀遺跡・伊加賀古墳群とその隣接地をはじめ、周知の遺跡範囲外であった枚方市中振北、および寝屋川市香里本通町において遺構・遺物包含層を確認し、それぞれ中振北遺跡、梨木元遺跡として新規に周知の埋蔵文化財包蔵地として登録されるに至った。このうち令和元年度(2019)には伊加賀

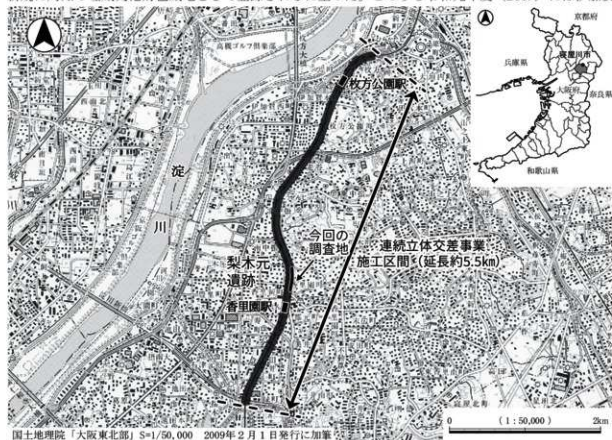


図1 事業計画範囲と梨木元遺跡の位置

遺跡・伊加賀古墳群において発掘調査を実施し、古墳時代の鍛冶関連遺物や飛鳥時代の集落、平安時代以降の耕作地などを確認した（河本 2022）。

本書で報告する梨木元遺跡は先述のように、令和元年度（2019）の試掘調査で新規に見えられたもので、枚方丘陵から淀川南岸の沖積低地に延びる尾根先端付近で、中世段階のものと推測される遺構・遺物が確認されるとともに、古墳時代にさかのぼる遺物も確認されている。今回の調査は、京阪本線の高架化工事に先立ち、並走する府道 21 号（八尾枚方線）を丘陵側に移設する計画のもと、その移設予定地を対象とした発掘調査を、令和 4 年（2022）9 月より実施することとなったものである。

## 第 2 節 調査の経過

現地での発掘調査、ならびに遺物整理事業は、令和 4 年（2022）9 月 1 日から令和 5 年（2023）7 月 31 日にわたる受託契約、ならびに令和 6 年（2024）2 月 1 日から 8 月 30 日にわたる受託契約において実施した。後者の契約には印刷・製本・発送を含む報告書作成事業を含む。令和 6 年 8 月、本書の刊行をもって、梨木元遺跡 22-1・23-1 調査に関わる一連の業務を完了した。

以下、試掘調査を含む作業経過を簡単に記載しておきたい。

令和元年度（2019）の試掘調査は工事予定路線約 5.5 km の範囲に 19 地点、22 か所の調査区を設けて実施した。このうち、寝屋川市香里本通町 3 に位置する調査区（6 区）は令和元年 12 月 4 日に調査を行い、現地地表下 2.2 m 付近の安定した遺構面上で柱穴などの遺構を確認し、中世のものを主体とする遺物の出土をみた。建物遺構などの復元には至らなかったものの、中世集落が存在することが推測された。

本調査は、試掘調査の成果を踏まえて新規に登録された周知の埋蔵文化財包蔵地のうち、府道移設予定地を対象としたもので、現道と既存構造物などですでに調査対象が遺失していると判断された範囲を除く 10 か所（のちに 1 か所追加され、11 か所に変更）の調査区を設けて順次実施した。終了順に調査日程を記載すると、2 トレンチは令和 4 年（2022）9 月 1 日に着手し、9 月 16 日調査終了。3 トレンチは 9 月 16 日着手、9 月 29 日終了。4 トレンチは 9 月 28 日着手、10 月 28 日終了。1 トレンチは 10 月 25 日に着手、11 月 9 日終了。8 トレンチは 11 月 9 日着手、11 月 11 日終了。9 トレンチは、11 月 18 日着手、12 月 2 日終了。10 トレンチは 12 月 7 日着手、12 月 9 日終了。6 トレンチは、11 月 30 日着手、令和 5 年（2023）1 月 31 日終了。追加された調査区である 11 トレンチは 2 月 1 日着手、2 月 15 日終了。最後の調査区となった 5 トレンチは 2 月 14 日着手、3 月 17 日終了であった。現地調査全体では令和 4 年（2022）9 月 1 日に着手、3 月 17 日に完了となる。なお、7 トレンチは 10 月 19 日に機械掘削に着手したが、予定深度付近まで掘削したものの、現代の攪乱と湧水の著しい中世以降の堆積層が深くにまで及んでおり、文化財保護課の立会を受け、調査対象から除外された。

令和 5 年度事業としては、令和 4 年度（2022）に調査が実施できなかった範囲に調査調査区 1 か所を設け（12 トレンチ）、令和 6 年（2024）2 月 1 日に着手し、3 月 19 日に調査を終了した。

調査期間中、トレンチごとに調査の進捗に応じて大阪府教育庁文化財保護課の現地立会を受け、調査成果を報告するとともに調査完了までの作業指示を受けた。また、令和 5 年（2023）1 月 20 日には寝屋川市教育委員会文化スポーツ室職員の視察を受け、調査成果の評価に関わる有益なご指示を得た。

現地調査終了後、令和 5 年（2023）4 月から 7 月に中部調査事務所において、また令和 6 年（2024）4 月から本部事務所において遺物整理作業を実施した。令和 6 年 5 月末日に報告書作成作業、資料収納作業を終了し、令和 6 年 8 月末日をもって報告書の印刷・製本を終了した。

## 第2章 位置と環境

### 第1節 地理的環境

粟木元遺跡は大阪府中部の寝屋川市に所在する。寝屋川市は旧河内国を三分割した場合の北河内地域に属し、東は交野市と、南は四條畷市、大東市、門真市、守口市と接している。西には淀川を介して高槻市、摂津市があり、北に位置する枚方市との市境付近に遺跡は位置している。周辺地形を概観すれば、寝屋川市東部は生駒山地とその北端につながる枚方丘陵が広がり、市域西部は淀川により形成された沖積低地が展開する。調査地の現地表面の標高は5～7mであり、丘陵地形と平野地形が接する地形にあたる。仮製地図や第二次世界大戦後間もないころに撮影された航空写真などからは、枚方丘陵西縁に南北に通る街道沿いに中振や郡、三井などの旧村が並び、また低地部では木屋や石津といった中世後期に形成されたと考えられる集落が点在する様子を見取することができる。また、条里型地割が現代にまで比較的良好に遺存しており、集落の周囲には水田域が広がっていた。現在は交通の便の良い駅付近ということもあって市街地化が進行しており、高層住宅が比較的多く営まれている。したがって調査地からのかつての眺望を確認できるものではないが、市街地化が進行するまでは、とりわけ低地域を介して淀川方面の眺望に優れていた土地と推測できる。

今回の調査地周辺に関わる地形環境についてはこれまでに市史等において詳述されているので（前田1998、別所2022）、その一部を引用しつつ、今回の調査地の地形環境を概観しておきたい。

地形分類図や地質分布図を参考にすると、今回の調査地は枚方丘陵と淀川低地の境界付近にあたる。東側に広がる枚方丘陵は大阪層群とされる未固結の粘土、砂、礫で構成され、枝状の谷が複雑に入り組みながら斜面を開析し、低地に接する付近に小規模な沖積錘などを形成する一方、寝屋川や讃良川付近に分布する比較的規模の大きい扇状地性微高地はみられない。調査地付近は生駒山地の西縁を南北に延びる生駒断層帯から枚方丘陵西縁に派生する枚方拗曲が通っており、拗曲崖である丘陵の急斜面が低地にすりつくような地形となっている。

一方、調査地から西、およそ1.5kmに位置する淀川堤防に至る間の低地域は、一般的には淀川の氾濫原とされるが、近年の詳細な地形判読（別所2022）によるならば、淀川低地のなかでも沖積扇状地と三角州の間に位置する蛇行原にあたると思われる。平坦な地形が広がっている印象が強いが、淀川の旧流路や分流通路など、埋没している屈曲の著しい蛇行流路が多数あり、破堤堆積物により形成された自然堤防も多数認められる。条里型地割が現在にもなお確認できる状況からは、古代以来の地形が良好に遺存する状況を推測しがちではあるが、中世末期段階の豊臣秀吉が築造した文禄堤による淀川流路の固定化以前は、現在想像する以上に淀川本流の影響を頻繁に受ける地形であったといえよう。寝屋川の本流も現在は東側の丘陵からの流れが本流とされているが、かつては淀川の分流通路であって、古墳時代には現在の寝屋川市南部付近で河内湖に注いでいたようである。今回の調査地周辺においても丘陵地域からの出水は、平地部で条里型地割を構成する水路に集約されつつ南下し、現在の寝屋川に至っている。

今回の調査地は大きくみると河内平野の縁辺に位置するといえるが、上記のような地形の大きな変換点に位置しており、地形環境の変化を敏感に反映しながら各時期の土地利用が行われてきたことが想定される。調査に際しては埋没微地形の変化を意識した理解がより求められるところである。

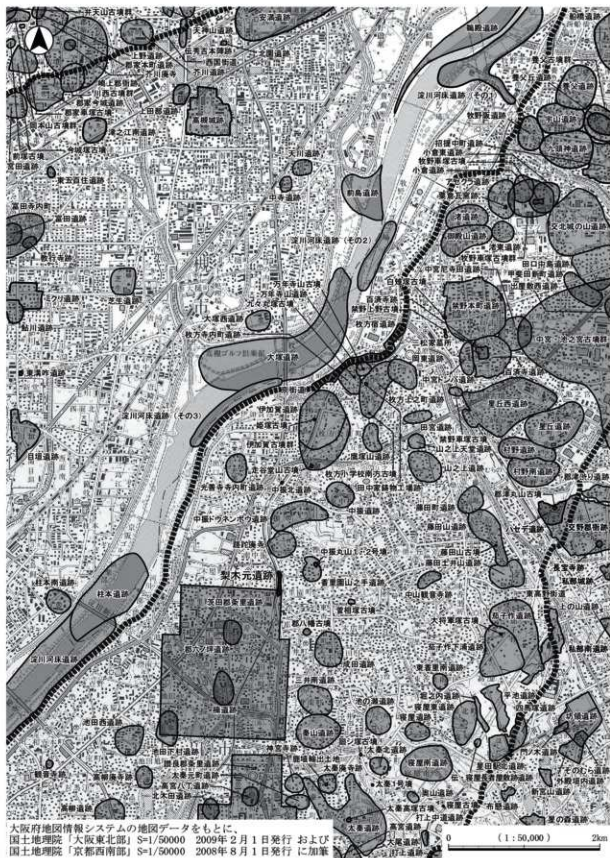


図2 淀川南岸東部地域遺跡分布図

## 第2節 歴史的環境

梨木元遺跡が位置する寝屋川市北部および隣接する枚方市南西部地域における歴史的環境を、主に埋蔵文化財の分布と調査履歴から概観しておく(図2)。寝屋川市から枚方市にかけて周知の埋蔵文化財包蔵地は数多く分布しているが、梨木元遺跡を含む枚方丘陵西縁は相対的に分布が希薄な地域といえる。

旧石器時代、縄文時代の遺跡や遺物は、寝屋川市域でも南寄りの太秦遺跡や讀良川遺跡、讀良郡条里遺跡などで断片的な旧石器の出土や、まとまった縄文土器・石器の出土があるものの、枚方丘陵西縁から淀川低地ではほとんどみられない。淀川低地域では高宮八丁遺跡や長保寺遺跡で縄文時代晩期の土器の出土があるが、これらはむしろ弥生時代の開始と関連した遺跡動態の可能性が高い。

弥生時代には当時の河内湖の汀線付近ともいえる立地をもつ讀良郡条里遺跡で最古段階の弥生土器を伴う集落が現れ、中期段階には低地域の微高地縁辺を利用した水田遺構も確認される。また低地域では高宮八丁遺跡で前期から中期にかけての遺構とともに、豊富な遺物の出土がみられるものの、中期中葉以降集落規模は縮小、代わって丘陵上には太秦遺跡・大尾遺跡が出現し、まとまった居住域とともに方形周溝墓からなる墓域も確認されている。後期には丘陵上では寝屋遺跡、寝屋南遺跡、低地では楠遺跡や高柳遺跡など小規模な集落が散在するようになる。楠遺跡では青銅器生産に関わる土製鋳型外枠や高杯状土製品の出土がある。また、弥生時代末期には小路遺跡で庄内形壺を含む多くの外来系土器を伴う集落と、前方後方形を含む周溝墓群が出現することが近年の発掘調査で明らかにされつつある。

古墳時代前期段階の集落遺跡は希薄だが、讀良郡条里遺跡では布留式土器の段階に他地域産の土器を伴う集落があり、前代の交流拠点としての性格は継続されているようである。中期になると部屋北遺跡や讀良郡条里遺跡、長保寺遺跡で大型の集落群が形成され、後期にまで継続する。低湿な地形環境の中でも相対的に地盤の安定した微高地上に、竪穴建物や掘立柱建物が集中して営まれ、韓式系土器や陶質土器、U字形板状土製品、移動式カマドなど、朝鮮半島との交流を示す遺物が多く出土している。さらに実用的な馬具や製塩土器、馬埋葬土坑をはじめとする馬遺体が多数確認されており、この頃本格的に導入された渡来人を核とする馬の飼育が近接地で行われていたと考えられる。専門的な馬生産のみならず、馬をはじめとする様々な文物の搬入出の窓口としての性格も有しており、井戸枠に再利用された準構造船の船体が複数みられることから、河内湖最奥部に位置し、海路と陸路の結節点としての港湾性の集落が復元される(森本ほか2007、森本2010)。また、多くの渡来人の居住は馬生産以外にも、土器生産や鉄器生産といった手工業生産をはじめ、港湾や倉庫の管理などといった様々な渡来系の新技術がこの地にもたらされたことを示している。類似する様相は梨木元遺跡により近い楠遺跡や郡六ノ坪遺跡でも認められ、寝屋川市北部でも古墳時代中期以降の外来系土器を多く含む遺物が認められる。しかし出土須恵器の様相には部屋北遺跡などとの差異も指摘されており(濱田2001・2008、南2011、小林2011)、渡来人に関わる集落の動態や各種生産の実態は複雑なものとも推測される。このような流通経済拠点的な性格を有する古墳時代の集落群も7世紀を迎える頃には衰退し、古代以降の集落様相はやや不明瞭となるが、高宮廃寺下層、寝屋東遺跡や寝屋南遺跡などの丘陵上へ移動した可能性が高い(吉田2012)。河内平野で一般的な集落動態といえる(広瀬1989、安村2010・2017、道上2017)。

古墳の様相としては、前期には枚方丘陵北端から東側に万年寺山古墳、藤田山古墳、禁野車塚古墳などが、丘陵南部では忍岡古墳といったおもに前方後円墳からなる首長墳がみられるが、中期以降に系譜が続くものではなく、丘陵西縁においては前期から中期にかけての首長墓と目される古墳が分布しない

(濱田 2009)。百舌鳥・市古墳群に大型前方後円墳が相次いで営まれた古墳時代中期前半においても、北河内地域では大型古墳が営まれることはなく、首長墓系譜は断絶するとされる(西田 2009)。古墳時代中期中葉以降には、丘陵南部の太秦高塚古墳のほか、丘陵西縁でも伊加賀古墳群の姫塚古墳といった中小規模の古墳がみられるようになり、梨木元遺跡に近い丘陵上にも中期後半～後期にかけて中振丸山 1 号墳、2 号墳が営まれる。しかし明確に首長墓として把握できる前方後円墳は四條畷市墓の堂古墳に限られ、総じて古墳分布、とりわけ首長墓系譜が希薄な地域といえる。一方、今回の調査地からはやや離れるが、現在の淀川に近い低地域においては、すでに墳丘や埋葬施設を削平された状況で古墳時代中期後半以降の中規模の帆立貝形前方後円墳や円墳、方墳が複数確認されており(梶古墳群、大庭北古墳群、普賢寺古墳群)、まとまった形象埴輪の出土が知られている。古墳時代後期に盛行する群集墳は北河内地域全体に低調で、今回の調査地付近でも、初期群集墳に位置づけられる太秦古墳群が 6 世紀前葉に造営を終えてのち、横穴式石室を有する群集墳は現在のところ認められない。一方、寝屋古墳、奥山 1 号墳、寝屋南古墳などの横穴式石室を有する古墳が散在的に分布する点は、その階層的な位置づけが課題ではあるものの、この地域における特徴的な状況といえる。寝屋古墳は大型の石材を用いた横穴式石室で、隣接する丘陵高所に営まれた終末期古墳である石の宝殿古墳を含め、有力層の古墳とされる。

奈良時代以降の集落様相も不明な部分が多いが、低地域にあたる長保寺遺跡では東西、南北方向に棟方向をもつ掘立柱建物群が確認されている。長保寺遺跡ではこのうち中世まで集落が継続するようで、条里型水田の内部における集落の一例を示している。高柳遺跡も低地域に営まれた古代以降の集落遺跡である。古代寺院としては、丘陵西縁に蹠陀廃寺や高宮廃寺などがあり、低地域には高柳廃寺跡のほか、長保寺遺跡でも瓦が出土する。枚方市蹠陀廃寺は今回の調査地から北に 500 m 離れた蹠陀神社付近に営まれたと考えられており、伽藍配置などは不明ながら、枚方市九頭神廃寺(くぐつじん)と同範の、外区に雷文を飾る複弁八弁蓮華文軒丸瓦(紀寺式)の出土が知られている。また、奈良時代に下る瓦も出土しており、瓦窯址の可能性も指摘される(竹原 1997)。寝屋川市高宮廃寺はこれまでに 6 回にわたる発掘調査が行われており、現在の大社御祖神社(おおむね)社殿を塔跡とみて、金堂の前面に東西両塔が並ぶ薬師寺式の伽藍配置とする意見と、金堂に回廊がとりつく川原寺式の伽藍配置を想定する意見がある(丸山 2018)。出土瓦には白鳳期にさかのぼる素弁八葉蓮華文軒丸瓦があり、創建時期を示すものと考えられる。またこの寺院に関連する遺跡として、南に位置する高宮遺跡では大型の総柱掘立柱建物群が確認されており、大規模な倉庫群と推測されている。なお、条里型水田については周知の埋蔵文化財包蔵地として、茨田郡条里遺跡、讃良郡条里遺跡が登録されている。讃良郡条里遺跡では 7 世紀代の小区画水田が 8 世紀には条里型水田に転換することが確認されており、おおむね奈良時代に条里施行時期を置くことができる。ただし、埋蔵文化財として遺存しやすい条里境や坪境の遺構は、それらが現代の道路や水路と重複している場合がほとんどで、具体的な調査例が乏しく、古代以降の土地開発についての所見も限定的である。古墳時代の集落遺跡として取り上げた楠遺跡や長保寺遺跡のように、条里型地割内で古代以前にさかのぼる遺跡の確認も知られており、古代以降の集落変遷が耕地開発との関わりの中で理解される(金田 1993 など) こともあるなかで、今後、耕地の展開と集落景観の変遷過程をともに検討していく事が求められるところである。

現時点では現代に旧村として把握される郡や中振、木屋など各集落の形成過程は明瞭ではないが、他地域の例を参考にすると条里型地割内や丘陵縁辺に存在した複数の居住域の集村によって形成された可能性が高く、今後の埋蔵文化財調査事例の蓄積をもって実態把握が行われていくものと思われる。



## 第3章 調査の方法

今回の調査および整理作業・報告書作成は、公益財団法人大阪府文化財センターの『遺跡調査基本マニュアル』および、その後の追加修正指示に則って実施した。

**調査単位** 事業契約ごとに調査名を付すことになっており、今回の調査は「梨木元遺跡 22-1」、「梨木元遺跡 23-1」となる。調査は着手前の用地境界など、工事エリアの区分に倣って12の調査区を設定し、順次実施した。個々の調査区の名称は、原則、南から北に1トレンチから10トレンチの名称を付し、調査開始後に追加された調査区を11トレンチ、12トレンチとした。

調査面積は1トレンチ75㎡、2トレンチ126㎡、3トレンチ29㎡、4トレンチ86㎡、5トレンチ140㎡、6トレンチ208㎡、7トレンチ56㎡、8トレンチ23㎡、9トレンチ10㎡、10トレンチ13㎡、11トレンチ49㎡、12トレンチ131㎡、合計946㎡である。

**地区割** 調査範囲内の2次元的な位置把握のため、調査範囲全域を世界測地系(平面直角座標系第VI系)に基づく10m×10mの区画に分割し、原則的にこれを単位とする地区設定を行った。区画の設定方法については図3に示した。

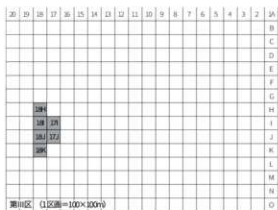
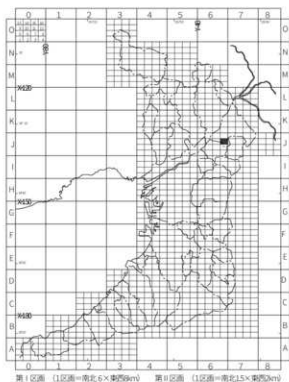
**遺構名・遺構番号** 調査時の遺構番号は各トレンチで遺構種別に関わらず通し番号を付し、遺構番号一種類の順で表示した。また、本書での報告に際しても、遺構番号を整理する必要がなかったことから、調査時に付した遺構番号と表記方法を、そのまま用いることとした。なお、遺構の種別については調査時に個別の把握を行う必要がない遺構については番号を付していないものがある。また、結果的に遺構としては認識しない遺物の出土状況について、便宜的に遺構番号を付して把握したものもある。

**掘削** 機械掘削は原則として、現地表面を構成する攪乱・盛土層、ならびに現代の耕作土層(第1層)、中世以降の堆積層(第2層)を対象とし、小型重機を用いて慎重に掘削を行った。調査区の形状などにより機械掘削が難しい部分と試掘調査で遺物包含層とされた土壌層(第3層)以下の土層、ならびに遺構の埋土については人力で掘削した。最終的な掘削深度については、調査完了前に大阪府教育庁文化財保護課の立会い指導を受け、その指示に従った。

**測量・図面による記録** 調査成果の記録のうち、調査範囲全体の形状や遺構の分布については、トータルステーションを用いて50分の1の全体平面図を作成した。個別の遺構や遺物出土状況などについては適宜、5分の1～20分の1縮尺で測量を実施した。土層断面図については、20分の1縮尺で適宜作成することとしたが、各調査区とも西壁の土層断面を記録することにより、調査範囲全体を通した旧地形や層序関係が把握できるよう努めた。なお、7トレンチについては、機械掘削のみの調査となったことから、図面による記録は調査範囲の平面図のみとなった。

**写真による記録** 調査成果の記録のうち、写真記録については、調査担当者の撮影による中判カメラ(PENTAX67)を用いた黒白ならびにカラーリバーサルの銀塩写真とともに、デジタルカメラ(Nikon D5600)を用いた記録も行った。なお、12トレンチについては、当センターの写真記録方針の変更により、デジタルカメラ(SONY α7R IV)による写真記録のみとなる。また、7トレンチについては、機械掘削のみの調査となったことから、写真による記録は行っていない。

**出土遺物の管理** 出土遺物は調査時の取り上げの単位ごとに登録番号を付し、出土遺物登録台帳を作成した。登録番号は1～145(22-1調査)、1～18(23-1調査)となった。このうち本報告書に掲載の



第I区画-第II区画-第III区画  
**L6-12-18H~18K・17I・17J**

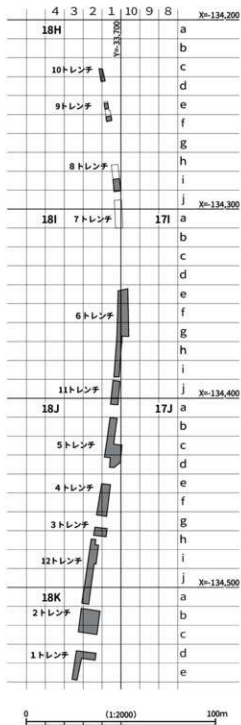


図3 調査区の配置と地区割図

遺物については、報告書を単位とする実測遺物番号、報告書掲載番号を個別に付し、実測・掲載遺物台帳を作成した。本書には試掘調査時に出土した遺物の一部も掲載しており、それらを含めた実測遺物番号は1~117となった。ほか写真のみ掲載の遺物を併せ、本書掲載の遺物点数は165点となった。報告書刊行後の管理には、報告書掲載遺物、不掲載遺物ともコンテナ等に収納し、掲載遺物、不掲載遺物ごとにコンテナ番号を付したうえで、上記台帳で管理するほか、収納コンテナリストを別に作成した。掲載遺物コンテナが1~4、不掲載遺物コンテナが1~5となった。

## 第4章 調査成果

### 第1節 地形と基本層序

今回の調査対象地点は、枚方丘陵の西縁麓にあたり、西が淀川南岸低地に接する位置にある。調査範囲の南端の調査区である1トレンチの現地盤高が標高7.2mで、調査範囲のほぼ中央となる試掘調査時に調査区(試掘6区)を設けた付近(今回調査の6トレンチに含まれる)が、標高5.6mを測り最も低い。6トレンチから北側には再び地盤は高まり、北端の10トレンチで標高7.6mとなる。1トレンチの南側は京阪香里園駅付近が最も高くなり、10トレンチの北にも現在寝屋川市と枚方市の境となっている尾根があって、ここから西側の低地には、江戸時代に淀川の洪水を防いだとされる赤井堤が淀川まで延びる。このような現況地形からみると、南北約320mにわたる調査範囲は高低差2m程度を測る緩やかな谷地形であって、低地でありながら、丘陵地形の影響を受けやすい環境と考えられる。試掘調査ではその中でも相対的に低い位置において、集落遺跡の可能性が高い遺構面を確認したこととなる。

明治期の複製図など過去の地形図を参考に、周辺の地形を概観すると、今回調査した範囲の北側と南側の地形が高く、尾根となる点は一致するが、中央の全体的に低い谷地形となっている間には、南北二つの谷とその間の微高地が含まれていることがわかる。試掘調査で遺構面を確認した地点はこの中央に想定される埋没微高地にあたると思われる。この微高地は枚方丘陵から派生する尾根が低地域に接する最先端付近にあると想定され、遺跡の性格を考える際にも注意が必要となる(図4)。

このような埋没微地形を反映し、調査範囲の土層序も一様ではない。試掘6区を含む6トレンチでは、現地表面以下、現代の盛土層、市街地化以前の水田作土層(第1層)、中世以降の堆積層と作土層の重なり(第2層)、中世段階の遺物包含層となる土壌(第3層)があり、その下部に基盤層である大阪層群を構成する黄褐色シルト層がみられる。このシルト層上面で中世段階の柱穴や土坑、溝などを検出したことから、これを第1面とした。この土層序を基本層序とするが、その南北で様相は大きく異なる。

6トレンチから南では、現地地形は標高がやや高くなっているが、埋没微地形としては逆に基盤層が大きく落ち込み、全体的には谷地形といえる。第3層とした遺物包含層の下部に堆積層と土壌層が複数重なり、湿地的な堆積環境を呈している。第3層以下の土壌層の中で比較的安定した層を第4層、第5層とし、おおむね第5層までを調査掘削の深度とした。出土遺物が希薄で各層の明確な形成時期を示すことは難しいが、わずかながら出土土器を参考にすると、第5層が弥生時代、第4層が古墳時代から古代に形成された可能性がある。ただし2トレンチで5世紀後半の遺構を検出した面は、第4層を覆う砂層(第3b層:堆積層)の上面であることから、第4層は5世紀後半よりは古い堆積層ということになる。一方、5トレンチでは第4層と考えられる堆積層から古代にさかのぼる可能性のある瓦片が出土している。各トレンチの西壁土層断面を通して層序対比を行ったが、厳密には各土層の連続や切り合いを確認した状況ではなく、おそらく5トレンチを流芯に、大きな谷の堆積環境の中で、堆積層の切り合いが複雑に重なっているものと考えられる。

6トレンチの北側では現代の盛土層の下部に厚い洪水砂層があり、それに覆われる形で第3層と考えられる土壌が認められた。中世以降の第2層が厚く堆積していると考えられ、第3層以下の状況はあきらかではないものの、現地地形を観察する限り、大きな谷地形が埋没している可能性が高い。

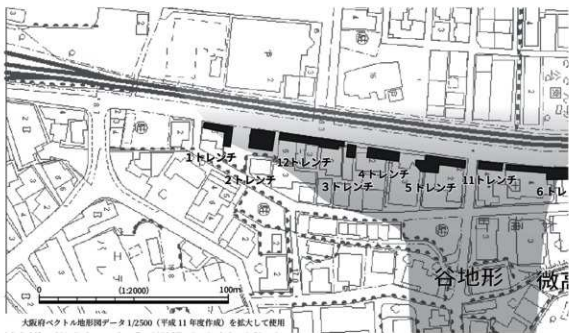
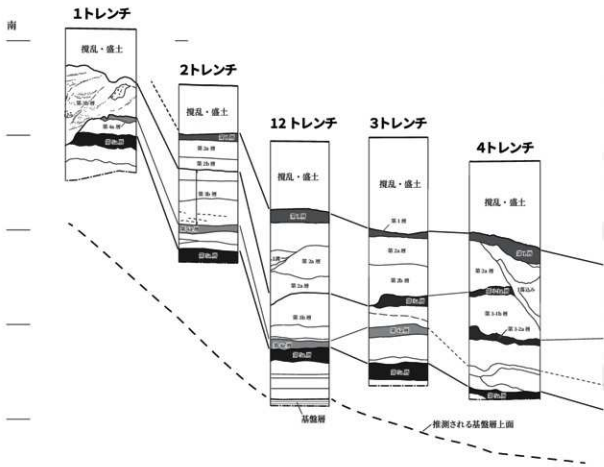
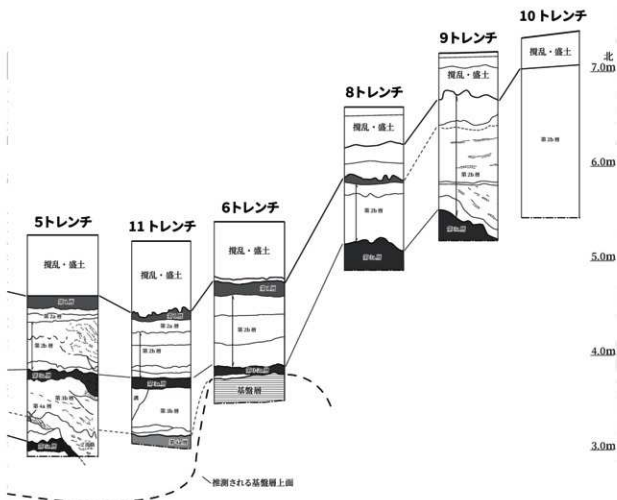


図4 埋没微地形と基本層序



## 第2節 遺構と遺物

### 第1項 1トレンチ

**概要** 今回の調査範囲の南端にあたり、調査前の状況は既存の構造物は撤去されていたものの、基礎や舗装が広く残っている状況であった。既存構造物の基礎を避けたL字形の調査区を設定し、調査面積は75㎡である。

既存構造物による地中の攪乱が想定以上に広く深く及んでいたため、調査対象となった範囲は限られたが、遺存する部分では第1面から第3面を確認した。土層序の確認によって地形変化についての知見を多く得ることができたが、明確な遺構は認められず、遺物もわずかの出土にとどまった。

**土層序** 現代の攪乱と盛土層を機械掘削により除去したところ、比較的厚い砂層が現れた。遺物を全く含んでおらず、現代に近い時期のものと想定し、掘削を進めたところ、その下部に2トレンチで第4層、第5層としたシルト層が現れたことから、第3b層にあたる洪水砂層であることが判明した。調査区の南端付近ではこの砂層の盛り上がりが見られるとともに、下部の第4層以下を深く浸食していることもあきらかとなった(図6、西壁断面)。この洪水砂層中には直径50cmを超え、第4層の層相をそのまま残すシルトブロック(偽礫)が含まれており、相当激しい水流を伴うものであったと考えられる。一方、調査区東端付近では第3b層の洪水砂は薄くなるものの、下部の第5層が東に急激に盛り上がる状況がみられ、その上面はT.P.+6.1mにまで達している(図6、南壁断面)。この付近は第4層以下の層序の乱れが著しく、第5層が分離したブロック(偽礫)や、第5層より下位に存在する砂層が第5層上部に噴出しているような状況(噴砂)が認められ、地震による変形を受けている可能性が高い。調査区西部で現代の攪乱と第3層による浸食を免れた範囲は限られていたが、残存範囲では第4層、第5層はほぼ水平の堆積を示している。しかしわずかに南方向が高くなる勾配をもつ様相が認められ、おそらく第5層以下に存在する基盤層上面の傾斜を反映しているものと考えられる。この基盤層については充分には確認できなかったが、部分的に把握したところでは調査区南端で、T.P.+5.1m、調査区東端でみられた噴砂の母体となった砂層の上面が5.4mを測る。なお、本来第3層より上位に存在する第1層、第2層は全く遺存していない。中世以降の地形改変により削平された部分もあったことが推定されるが、最終的には現代の造成によって削られたものと考えられる。

**遺構** 現代の攪乱を免れた範囲では、第3b層の上面を第1面として精査したが、遺構はみられなかった。第3b層の下部に第4層、第5層とした土壌層があり、それぞれ上面を第2面、第3面として面的な検出を行ったものの、遺構はみられなかった。調査区南西角付近に、第3b層が深く堆積する幅2m程度の溝状の痕跡がみられたが、人為的な遺構か、第3b層による洪水時の浸食の痕跡かは不明である。仮に人為的に掘削された溝であれば、第2面に残された人間活動の唯一の痕跡となる。

**出土遺物** 1トレンチから出土した遺物はわずかで、第3b層から弥生土器の可能性のある細片2片が出土したほかは、図版24-118に示した弥生土器甕の可能性のある細片1片が出土したのみである。

**小結** 1トレンチは丘陵から延びる尾根の間を開析した谷の内部に相当すると思われ、浸食を受けた基盤層(砂層)の上部が堆積と陸化を繰り返しながら埋積し、現代の地形を形成したのと考えられる。埋積の時期については判断する材料は少ないものの、第5a層出土土器が弥生土器である可能性が高いことから、弥生時代以降、埋積が進んだと考えられる。また遺物の出土量が少ないことから、隣接地においては中世以前の土地利用も希薄であった可能性が高い。

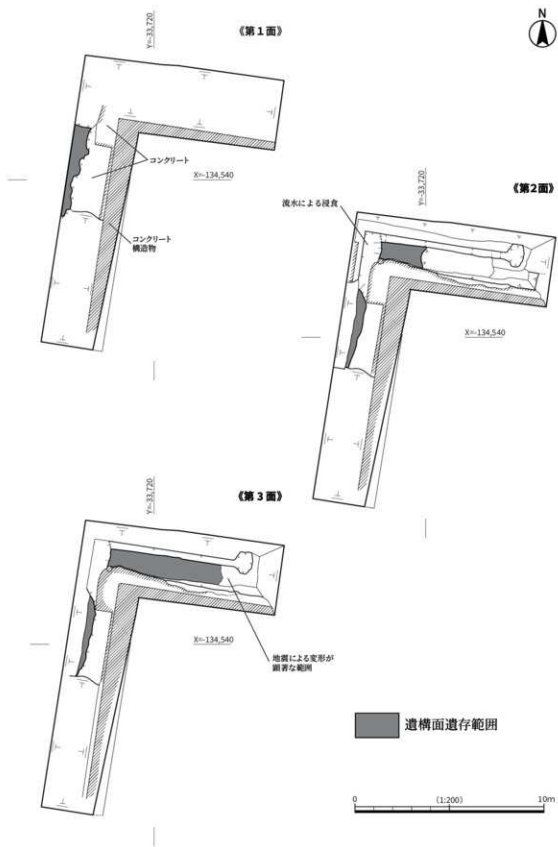


図5 1トレンチ 平面図

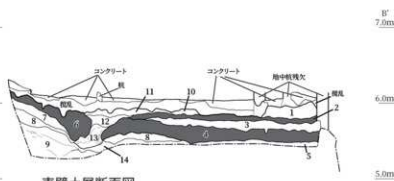
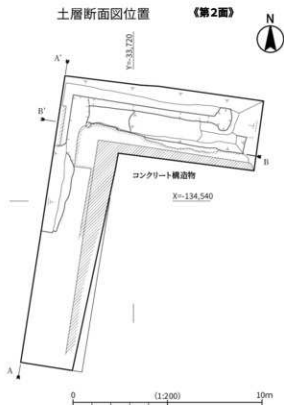
A' 7.0m  
6.0m  
5.0m



西壁土層断面図

1. 2.5YR/1 灰白～SiO<sub>2</sub> 灰 細粒砂～粗粒砂 ライナ断面【第3a層】
2. 2.5YR/1 灰白～SiO<sub>2</sub> 灰 粗粒砂混じりシルト【第4a層】
3. N4/0 灰 シルト～シルト質粗粒砂 粗粒砂多く混じる【第4b層】
4. N2/0 黄 シルト～シルト質粗粒砂 粗粒砂多く混じる 上面に乾煎 東寄りで約3cm人の内臓混じる【第5a層】
5. N3/0 灰 シルト～シルト質粗粒砂 粗粒砂多く混じる【第5a層】
6. N2/0 黄 シルト～シルト質粗粒砂 粗粒砂多く混じる 層1～5cm人の内臓、並内臓多く混じる【第5a層】
7. N3/0 粗灰 シルト質粗粒砂 粗粒砂～径2cm大の内臓、並内臓多く混じる【第5a層】
8. N4/0 灰 細粒砂 中～粗粒砂多く混じる 径2cm大の内臓、並内臓多く混じる【第5a層】
9. 7.5Y5/1 灰 細～粗粒砂 中～粗粒砂多く混じる 下に粗粒砂【第5b層】
10. 2B5/1 青灰 中～粗粒砂 シルトの小ブロック混じる【砂層】
11. N3/0 粗灰 シルト～シルト質粗粒砂 中～粗粒砂多く混じる【砂層 4～6cm】
12. N3/0 粗灰 粗粒砂混じりシルト～粗粒砂 径1cm人の内臓混じる【砂層 7～9cm】
13. 2.5Y5/1 黄灰 粗粒砂 ライナあり【砂層 9～10cm】
14. N4/0 灰 シルト質粗粒砂【砂層 10～11cm】

土層断面図位置 《第2面》



南壁土層断面図

1. 2.5YR/1 灰白～SiO<sub>2</sub> 灰 細粒砂～粗粒砂 ライナ断面【第3a層】
2. N4/0 灰 粗粒砂混じりシルト【第4a層】
3. N4/0 灰 シルト～シルト質粗粒砂 粗粒砂多く混じる【第4b層】
4. N2/0 黄 シルト～シルト質粗粒砂 粗粒砂多く混じる 上面に乾煎 東寄りで約3cm人の内臓混じる【第5a層】
5. N3/0 灰 シルト～シルト質粗粒砂 粗粒砂多く混じる【第5a層】
6. N2/0 黄 シルト～シルト質粗粒砂 粗粒砂多く混じる 層1～5cm人の内臓、並内臓多く混じる【第5a層】
7. N3/0 粗灰 シルト質粗粒砂 粗粒砂～径2cm大の内臓、並内臓多く混じる【第5a層】
8. N4/0 灰 細粒砂 中～粗粒砂多く混じる 径2cm大の内臓、並内臓多く混じる【第5a層】
9. 7.5Y5/1 灰 細～粗粒砂 中～粗粒砂多く混じる 下に粗粒砂【第5b層】
10. 2B5/1 青灰 中～粗粒砂 シルトの小ブロック混じる【砂層】
11. N3/0 粗灰 シルト～シルト質粗粒砂 中～粗粒砂多く混じる【砂層 4～6cm】
12. N3/0 粗灰 粗粒砂混じりシルト～粗粒砂 径1cm人の内臓混じる【砂層 7～9cm】
13. 2.5Y5/1 黄灰 粗粒砂 ライナあり【砂層 9～10cm】
14. N4/0 灰 シルト質粗粒砂【砂層 10～11cm】

図6 1トレンチ 土層断面図



## 第2項 2 トレンチ

**概要** 1 トレンチの北にあり、今回の調査では比較的広い、調査面積 126 m<sup>2</sup>を測る方形の調査区である。調査着手以前は既存建物を撤去したのちに設けられた仮設駐車場であった。

調査では第1面～第3面の遺構面を検出し、第1面では古墳時代中期後半の溝を検出した。第2面、第3面は堆積層中に形成された土壌層の上面を遺構面とし、第2面は南西から北東に緩やかに傾斜する平坦面を検出した。人為的な遺構はみられないものの、蛇行しながら流走する小規模な溝状の流水痕跡が認められた。第3面は調査区の南寄りに、第2面の傾斜に直交する形でトレンチを設け、部分的な確認にとどめた。後述するように、地震動による変形構造の影響が大きいもの、おおむね南西から北東に緩やかに傾斜する平坦面が認められた。遺構はみられない。

**土層序** 現代の盛土層や攪乱土の下に市街地化直前のものと考えられる作土層があり、その下に中世の土器を含む土壌化のゆるやかな作土層ないしは、やや土壌化の進んだ堆積層（第2層）がみられた。その下層には厚い洪水砂（第3b層）が確認されたことから、当初機械掘削の対象として掘削を進めた。この堆積層上面の一部に古墳時代の遺構を確認したことから、第1面として人力掘削の対象とした。この遺構に伴う土壌層となる第3a層は、遺構を確認した調査区北東部分にわずかに残されているのみであり、ほとんどは第2層による攪拌で削平されたものと考えられる。第3b層の下部には第4層、第5層とした2組の土壌と堆積層のセットがあり、第4層上面を第2面、第5層上面を第3面として、調査した。土層ブロックの分断・移動や液状化の痕跡など、1 トレンチと同様、第4層、第5層には地震動による変形構造の顕著な部分が認められた（図7下段土層断面）。

**遺構** 第1面では調査区の北東角部分でL字状に分布する小規模な溝を検出した（5～7溝）。本来は連続する溝で、上部の削平により下部を寸断した形で検出したものである。検出状態での個々の溝の規模は一覧表に記載したが、上部を削平されていることから本来の大きさではない。本来の規模は溝幅 1.5 m程度と推測する。

溝内部からは完形に近い土器がまとも出土している（図10-1～7）。5溝と6溝の間は本来は連結する溝のコーナー部分にあたるが、ここから1土器として把握した須恵器の一群が出土した。ほぼ完形に復元できた有蓋高環（1）のほか、甕体部の細片がある。6溝の内部には2土器として把握した須恵器の一群があり、坏部の約二分の一を失った有蓋高環（2）と同一個体と考えられる有蓋高環の坏部と脚部の破片（6・7）が出土した。5溝の内部からは3土器として把握した完形の須恵器有蓋高環3点（3～5）が出土した。これらの須恵器は有蓋高環に蓋が伴わず、一部が失われているものもあるが、おそらく完形の土器が溝内部に意図的に配置されたものと考えられる。ほかに5溝からは断面がセピア色を呈する須恵器細片が1点、6溝からは図10-8に図示した須恵器無蓋高環片と土師器細片1点、7溝からは土師器の細片1点が出土している。なお、6溝の埋土の一部に直径0.3 m程度の範囲が焼土状に変色した部分があり、4焼土としたが、この場所で火をたいた痕跡とは判断できなかった。

**出土遺物（図10）** 2 トレンチでは上述の第1面溝出土遺物のほか、層出土遺物もわずかにみられたが、全体的に遺物の出土量は少ない。図示し得たものを図10に示す。

1～7は須恵器の有蓋高環である。6・7を除くと、ほぼ完形の資料であって、いずれも脚部に円形透かしを三方向に施し、口径が10.5～11.0 cm、器高が8.9～9.5 cmとほぼ5 mm程度の範囲に収まっている。口縁や脚端など細部の造形もほぼ共通しており、同形同大の一群といえる。陶色 TK23 型段階に属するもので、5世紀後半頃のものと考えられる。6・7は破片資料であり、復元法量、端部形状がやや異

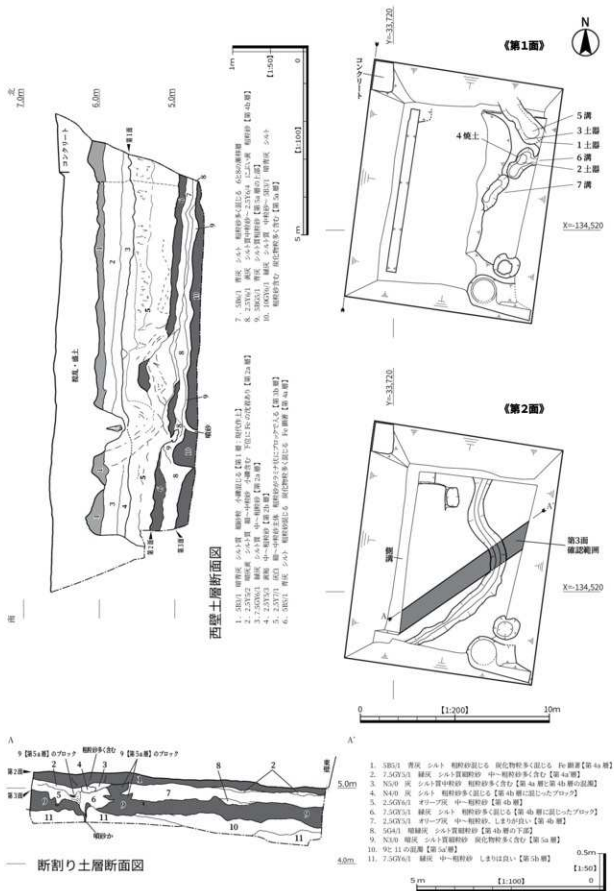


図7 2トレンチ 平面図 土層断面図

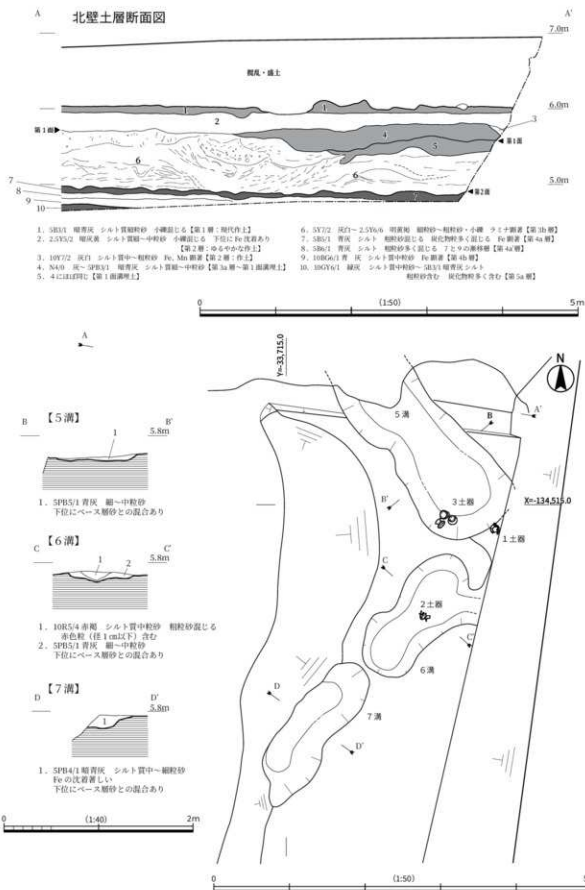


図8 2トレンチ 遺構 平・断面図 土層断面図

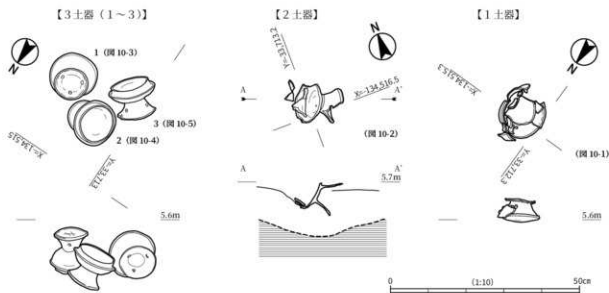


図9 2トレンチ 遺物出土状況図

なっている。8は細片であるが、須恵器無蓋高環の坏部であろう。1条の突帯下方に波状文が認められる。9は機械掘削時に第2層から出土した韓式系土器の細片で、甕の体部片と考えられる。外面に鳥足文タタキが認められ、朝鮮半島百濟あるいは梁山江流域地域に系譜をもつ土器であろう。写真のみの掲載としたものに、第3b層から出土した土師器片がある(図版24-119、120)。比較的大ぶりの破片で119は壺、120は高環の可能性がある。摩滅が著しく、器壁の調整も確認できないものの、古式土師器の可能性を想定する。これら以外には土師器甕、瓦器碗、須恵器の細片がわずかに出土しているのみである。

**小結** 2トレンチも1トレンチ同様、尾根と尾根にはさまれた大きな谷の内部にあたり、弥生時代以降の埋積により現在の景観が形成されてきたと考えられる。第4a層、第5a層とした土壌層は、水田作土の可能営は低いと考えるが、古墳時代中期以前と考えられる第3b層の堆積後、5~8溝が掘削され、5個体以上の須恵器有蓋高環が溝内部に埋置された。この溝の性格については根拠は多くないものの、方形にめぐる可能性があることや、内部に埋置された土器の様相から、方墳の周溝と考えておきたい。図11に示したように、12トレンチの調査で検出した3溝は、2トレンチ5溝の延長線上にあり、

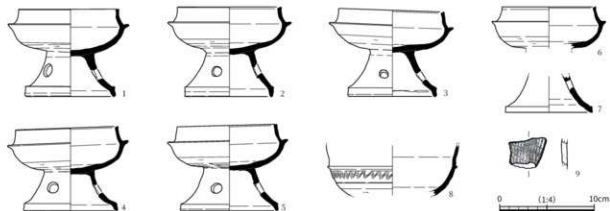


図10 2トレンチ 出土遺物

なおかつ直角に屈曲する可能性の高いものである。これらを一連の遺構とし、屈曲部をコーナー部分とみると、一辺約11mの規模を復元することができる。ただし、これらの遺構からは、埴輪や古墳副葬品など、直接的に古墳であることを示す遺物は全くみられない。また、埴輪については細片が12トレンチから5トレンチにかけての第2層とした中世以降の堆積層、ないしは作土層から出土しているものの、古墳と想定する遺構に伴うものと断定する事は難しい。従って古墳の存在を断定できないものの、埴丘部を含めた溝上面が大きく削平を受けている事も事実であり、古墳である可能性は高いものとしておきたい。

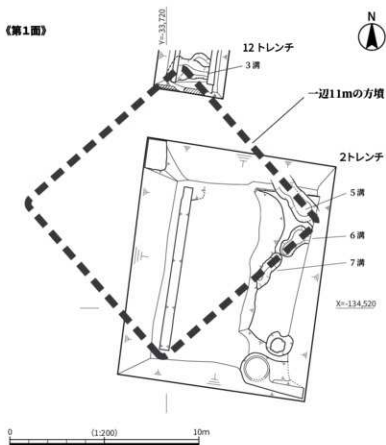


図11 2トレンチ・12トレンチ 古墳復元図

### 第3項 12トレンチ

**概要** 2トレンチの北に接した位置に設けた南北に長い調査区で、調査面積は131㎡を測る。調査着手以前は既存建築物の撤去はされていたものの、地下埋設物が多数残存している状態であった。さらに現代の攪乱などの影響で掘削範囲は限られたものとなったが、第1面～第3面を面的に調査した。第1面では砂層（第3b層）の上面で溝と不定形な落込などを検出したが、第2面、第3面には遺構はみられない。機械掘削対象層準で確認した中世以降の大型溝があり、便宜的に1溝と呼称する。

**土層序** 現代の盛土層の直下に現代の作土層があり、以下、中世以降の作土層と堆積層が重なる。部分的に残存する第3a層とした土壌層を除去した第3b層上面を第1面とした。標高は調査区南端でT.P.+5.6m、北端でT.P.+4.4mであり、北に下る地形である。第3b層以下にはT.P.+4.7m～3.8m付近に黒色土壌があり、その上面を第2面とした。さらにその下部、T.P.+4.6m～3.8m付近にみられる黒色土壌上面を第3面とした。

**遺構** 第1面で溝、土坑、落込、ピット、杭等を検出した。南端部分で検出した3溝は、幅1.3m、深さ0.5mを測る東西方向の溝であるが、調査区西壁断面にはその延長と考えられる痕跡が南端にわずかに認められるのみで、南東から南西へ大きく屈曲するものと考えられる。先述のように2トレンチ5溝の延長上にあり、同一の遺構である可能性が高い。しかし古墳時代の遺物はみられず、図15-11～14に示したものを含み、古代～中世の土器片が24点出土した。4土坑は3溝の北に位置する深さ0.15mほどの不定形の土坑で、底部の凹凸が著しく、遺物は出土していない。5落込はその北東に位置する

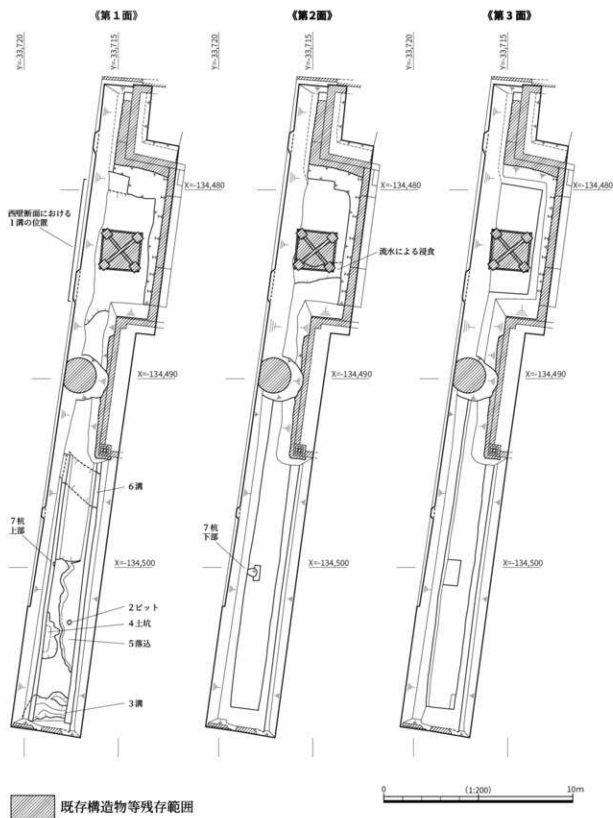


図12 12トレンチ 平面図



深さ0.1m程度の浅い落込で、4土坑とも人為的な遺構ではない可能性がある。出土遺物は奈良時代を主体とする土器片10点で、そのうち図示可能なものを図15・15・16に示した。なお、5落込の埋没後に掘削された柱穴1基があり、2ピットとした。直径0.25m、深さ0.15mを測り、遺物は出土していない。5落込の北側で第1面は大きく下がるが、この部分は湧水が著しく、面的な確認が困難であった。下層掘削時に土層断面で確認したところ、南東から北西へ流れる流路状の落込を確認し、6溝とした。確認できた部分では幅1.5m、深さ0.5mを測る。第2層出土として取り上げた遺物の中に6溝出土のものを含む可能性がある。また、第1面の検出段階では排水用側溝の内部に位置した杭痕跡があり、7杭とした。検出面より南東方向に斜めに深く打ち込まれた杭と考えられ、第2面検出時にその下部を確認した。第1面より杭先端まで1.2mを測る。

第2面、第3面では南から北に傾斜する地形を検出したが、第2面で1トレンチ検出のものと同様、第3層洪水砂による東西方向の浸食痕跡を確認したのみで、遺構、遺物はみられない。

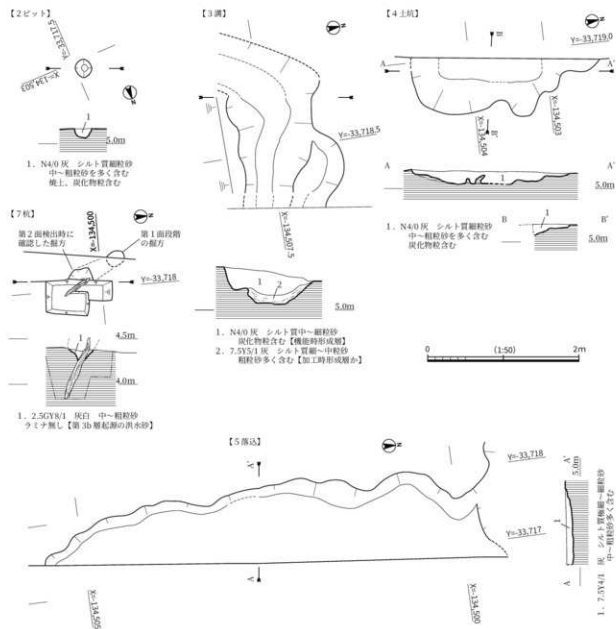


図14 12トレンチ 遺構 平・断面図



出土遺物(図15) 12トレンチから出土した遺物には古墳時代から中世にかけてのものがあるが、いずれも細片で、第2層出土のものが主体を占める。図15-11~13は中世の土師器皿、14は瓦器椀で、ともに3溝出土である。3溝を古墳時代の遺構と考えると、溝埋土に残存していた第2層出土遺物の可

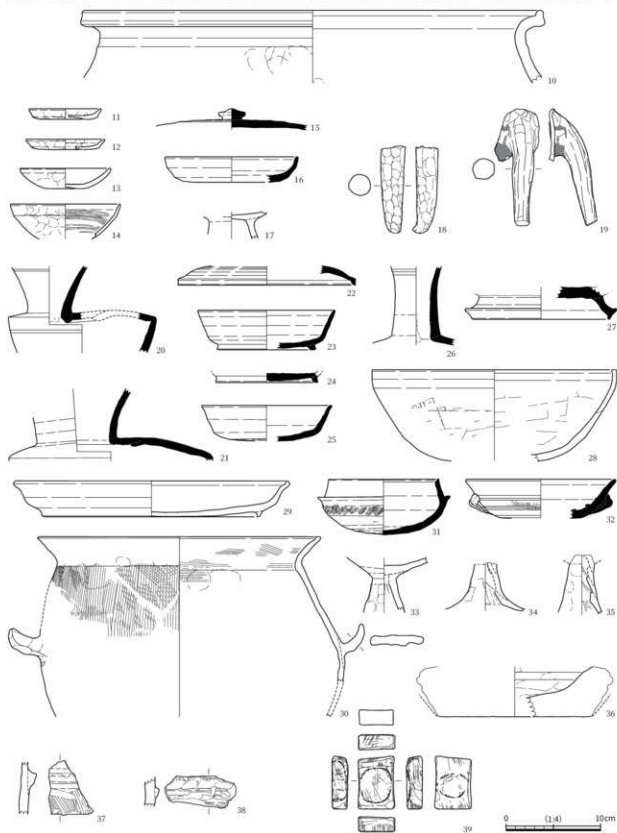


図15 12トレンチ 出土遺物

能性がある。15・16は5落込出土の土器で、8世紀の須恵器である。17～19は第2層から出土した中世段階の土器で、17は台付皿高台部分の残欠、17・18は羽釜の足である。20～30は第2層出土の奈良時代の土器で、残存部分がわずかであり、復元的に図化したものも多い。20・21は平瓶で、体部頂の円盤閉塞部分がわずかに残る。28は金属器模倣の土師器鉢、29は高台の付く皿で、ともにトレンチ南寄りでまとまって出土した。暗文は確認できないが、器壁が薄く剥離した可能性もある。30の土師器甕は調査区北寄りで出土したもので、三角形の両把手が遺存している。近辺からは図版25～129の須恵器大甕が、多くの体部片とともに出土している。28～30は相対的に残存部位は多い。31は5世紀中葉～後半のやや大ぶりの坏身で、外面に波状文を施す。西壁の崩落の際に出土した遺物で、ほぼ完形品である。32は無蓋高坏の坏部で、やや浅めの坏部に把手が付くが、坏部と把手の間に粘土が詰まった状態で焼成されている。写真のみの掲載としたが、図版25～127・128は細片ながら外面に組紐文や列点文が認められ、初期須恵器器台の可能性もある。特徴的な遺物に、図15-33～35、図版29-133～139に示した土師器高坏脚部がある。いずれも脚部を中心とした残存で坏部との接合方法も明瞭ではないが、脚部内面に粘土紐(板?)をらせん状に巻き上げた粗い痕跡をそのまま残している。総じて小振りであり、手づくね土器を思わせるものであって、35と134～139は層出土ながらまとまって出土している。古墳時代の祭祀用の土器の可能性を想定しておきたい。図15-36は大振りの土器底部と考えられる破片で、胎土が粗く、器壁の残りも悪い。平底を呈するので弥生土器の可能性も想定するが、他の弥生土器の出土はなく、古墳時代もしくは古代の特殊な土製品かもしれない。12トレンチからは埴輪片も比較的多く出土している。図示した37・38の2点と図版30に写真のみ掲載したものを併せて8点が出土している。形象埴輪の可能性のある145をのぞき、円筒埴輪が主体といえるが、それぞれ特徴が異なり同一個体ではない。総じて窯焼成であり、外面に二次調整はみられない。やや不鮮明ではあるが、38の突帯の貼り付けには断続ナデ技法かと考えられる痕跡がみられる。石製品に図15-39の砥石と図版25-126の石鋼片がある。石鋼片は外面に煤が付着しており、実用に供された痕跡といえる。輸入陶磁器には図版25-122の白磁片、123・125の青磁片があり、124は瀬戸と考えられる極細片である。なお、図15-10は1溝内の堆積層から出土した陶器片である。

**小結** 12トレンチは基盤層との関係でいえば2トレンチ同様、尾根間の谷地形の内部にあたり、弥生時代以降の埋積により地盤が形成されたと考えられる。その過程において比較的厚い堆積層の上面に

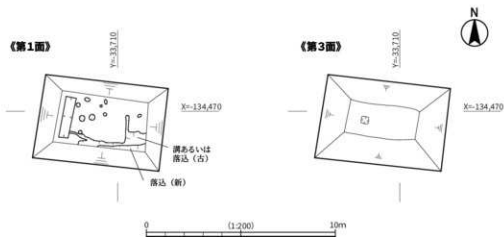


図16 3トレンチ 平面図

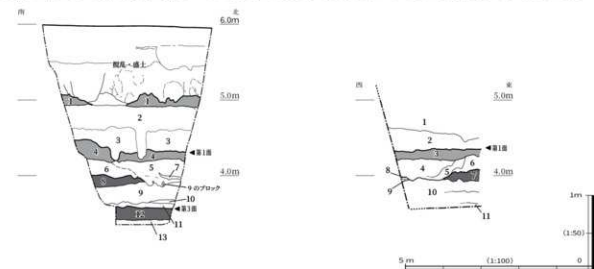
あたる第1面において、古墳が営まれるなどの土地利用が試みられたと考えられる。出土遺物については、遺構に伴うものはほとんどみられなかったが、第2層出土遺物に古墳時代の土器・埴輪、奈良時代の土器、中世の土器・石製品があり、周辺地域での土地利用の初段階を示唆する。特に埴輪に関しては後述する5トレンチ出土のもの併せて、丘陵上部における古墳分布を反映したものと考えられる。また奈良時代の土器がまとまって出土したこと、またその遺存状況が相対的に良好なことから、奈良時代の集落が近接地に存在するものと考えられる。

#### 第4項 3トレンチ

**概要** 12トレンチの北に接する位置にあたる方形の調査区で、調査面積は29㎡を測る。調査着手前は既存建物を撤去したのち、仮設舗装が施された状況であった。調査では第1面、ならびに第3面を面的に調査し、第2面を土層断面で確認した。第1面では土壌層上面で溝と小規模なピット、落込を検出したが、多くは上層第2層が埋土となるもので、第2層中の攪拌などの痕跡と考えられる。第2面、第3面には遺構はみられない。

**土層序** 現代の盛土層の直下に現代の作土層があり、以下、中世以降の作土層と堆積層が重なる。第3a層とした土壌層上面を第1面とした、第3a層以下には土壌層の重なりがあり、比較的まとまった遺物の出土をみたが、遺構面として明瞭には把握できなかった。T.P.+3.6m付近に黒色土壌があり、上面が第3面にあたる。

**遺構** 第1面で東西方向の溝ないしは落込の重複と、小規模なピットを9基検出した。落込の新しい



西壁土層断面図

1. N40 灰 シルト質細粒砂 中～粗粒砂多く混じる【第1層】
2. 2.5V6/1 黄灰 シルト質細粒砂 粗砂～小礫含む Feの降下層【第2層】
3. 2.5V3/1 黄灰 シルト質中～粗粒砂 小礫含む Feの沈着層【第2層】
4. 10YR4/1 灰灰 シルト質細粒砂 小礫含む Mnの沈着層【第3a層】
5. N40 灰 シルト質中～粗粒砂 第3b層 土壌の二次堆積砂
6. N40 灰 細粒砂 中～シルト質【第3a層 土壌の二次堆積砂】
7. N20 黒 シルト細粒砂【第3b層 土壌の二次堆積砂】
8. N50 黒 細粒砂 中～シルト質【第4a層】
9. 2.5G2/1 黄オリーブ灰 中～細粒砂 ライモナミふきないの洪水砂【第4b層】
10. 9と11の混層【第4b層 9の埋物に伴う11のまきかけ】
11. 5G2/1 明緑灰 シルト～粘土 埋物遺体(灰化体) ライモナミ入【第4b層】
12. 2.5G2/1 黒 シルト 粗粒砂が非常に多く含む【第5a層】
13. 2.5V4/1 黄灰 シルト質中～粗粒砂 12との境界不明瞭 埋物変化【第5b層】

北壁(部分)土層断面図

1. 2.5V6/1 黄灰 シルト質細粒砂 粗砂～小礫含む Fe降下層【第2層】
2. 2.5V3/1 黄灰 シルト質中～粗粒砂 小礫含む Fe沈着層【第2層】
3. 10YR4/1 灰灰 シルト質細粒砂 小礫含む Mnの沈着層【第3a層】
4. N40 灰 シルト質中～粗粒砂【第3b層 土壌の二次堆積砂】
5. N40 灰 シルト質中～粗粒砂  
N20 黒 シルト～細粒砂のブロッコ混じる【第3b層 土壌の二次堆積砂】
6. N60 灰 細粒砂 中～シルト質【第3a層 中～粗粒砂】
7. N50 黒 細粒砂 中～シルト質【第4a層 中～粗粒砂】
8. N20 黒 シルト～細粒砂【第3b層 土壌の二次堆積砂】
9. N40 灰 シルト質中～粗粒砂【第3b層 土壌の二次堆積砂】
10. 2.5G2/1 黄オリーブ灰 中～細粒砂 埋物に伴う11のまきかけ【第4b層】
11. 5G2/1 明緑灰 シルト～粘土 埋物遺体(灰化体) ライモナミ入【第4b層】

図17 3トレンチ 土層断面図

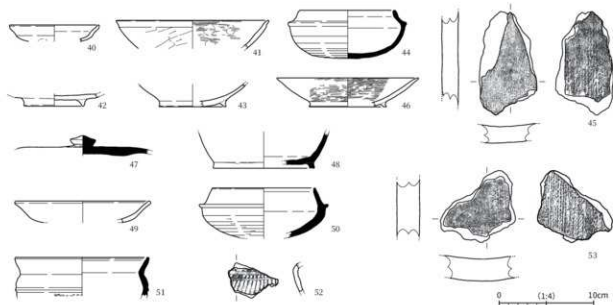


図18 3トレンチ 出土遺物

ものは、ほかのピットとともに第2層を埋土とするもので、第2層中から掘り込まれた溝や杭の痕跡と考えられ、遺構番号は付していない。古い落込は小規模な溝が連結するもので、輪郭が不明瞭であり、性格も不明である。これら遺構の掘削時には土器細片が少量出土しているが、明瞭に遺構に伴うものは判断できなかった。また、調査区北西角付近で第3a層が厚みを増す部分があり、遺構の可能性も想定して精査したが、土壌層と明瞭に区分できるものではなく、第3a層の一部と判断した。

**出土遺物 (図18)** 3トレンチから出土した遺物には古墳時代から中世にかけてのものがあるが、いずれも細片で、第3層出土のものが主体を占める。図18-40は中世の土師器皿。41~43は黒色土器の碗としたが、41は土師器の可能性を残す。44は須恵器坏身で、いわゆる土釜状の形態をもつ。桶遺跡に類例があり、初期須恵器の可能性がある。46は黒色土器の皿で、内外面に細かなミガキが残る。9世紀のものか。47、48は須恵器蓋、および坏で、49の土師器坏ともども奈良時代のものと考えられる。50は古墳時代の須恵器坏身、51は細片ではあるが、須恵器の把手付碗と考える。わずかに波状文が認められる。52は外面に平行タタキ・螺旋状沈線を残す軟質の細片で、韓式系土器に位置づけられる。45、53は平瓦の細片で、凸面に縄目タタキ、凹面に布目の圧痕を残す。古代の瓦と考えられる。

**小結** 3トレンチは2トレンチ同様、尾根間の谷地形の内部にあたり、弥生時代以降の埋積により土層が形成されたと考えられる。その過程において溝の掘削など、土地利用が試みられた可能性は高いが、一時的なものと考えられる。出土遺物はほぼ、谷を埋めた堆積層に含まれるもので、上下の層で年代の逆転する遺物の出土も多い。この地での活動痕跡や堆積の時期を示すというよりは、近隣地での土地利用の諸段階を示唆するものと考えられる。

#### 第5項 4トレンチ

**概要** 3トレンチの北、6.5m離れた箇所に設けた長方形の調査区で、調査面積は86㎡を測る。3トレンチ同様、既存の建物が撤去されたのちに舗装が施された状態で、調査に着手した。ほかのトレンチとは土層序にやや異なる部分があったが、第1面、第2面、第3面の3面の遺構面を確認し、それぞれ面的に確認を行った。第1面では中世以降に掘削された落込により調査区北半分が広く攪乱されてい

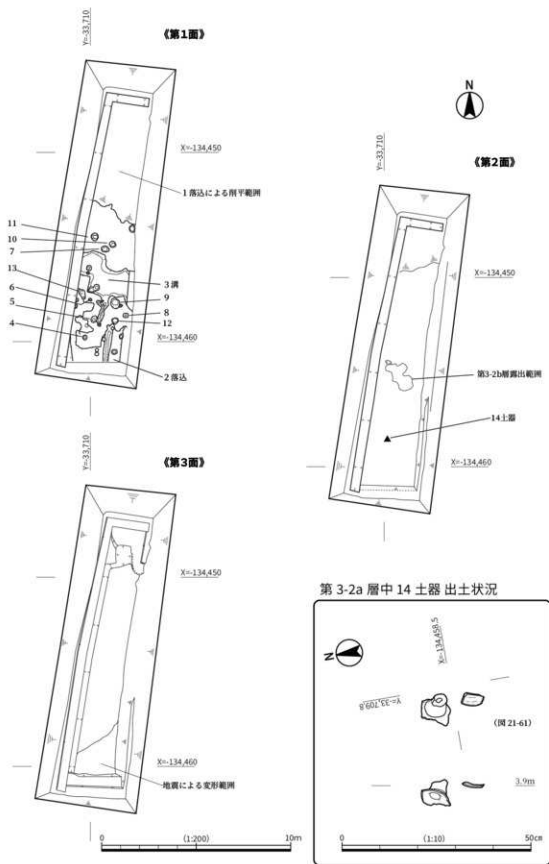


図19 4トレンチ 平面図 遺物出土状況

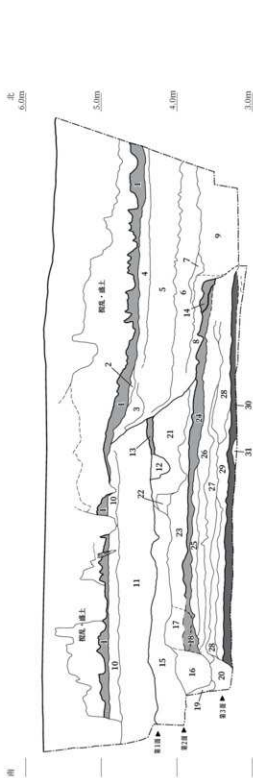


図20 4トレンチ 土層断面図

1. 2.5343 腐敗 シルト質細砂 中～粗砂多量含む【第1層】
2. 10R043 腐敗 シルト-細砂【1層】
3. 20プロックと2.5342 灰カーブ 細砂の混合 中～粗砂多量含む【1層】
4. 2.5352 腐敗 中～粗砂【1層】
5. 2.5353 腐敗 シルト質細砂 細～粗砂多量含む 小礫混じる Feの沈着顕著
6. 5B41 腐敗 シルト 粗砂多量含む 上部にFeの沈着顕著【1層】
7. 6c-28のシルト小プロック混じる【1層】
8. 10R071 明腐敗 シルトプロックと N30 泥 細砂プロックの混合【1層】
9. N30 腐敗 シルト質-細砂 小礫混じる 腐敗カラムの高低含む【1層】
10. 5B01 腐敗 シルト質中粒砂 細り混じり Feの沈着顕著【第2層】
11. 5B071 腐敗 シルト質細砂 細り混じり Feの沈着顕著【第2層】
12. N40 泥 シルト質細砂 灰化物多量含む【第2層(1)下部の遺構】
13. N50 泥 細砂 シルト質細砂 粗砂多量含む【第3-1a層】
14. N50 泥 シルト質細砂 中～粗砂多量含む【第3-1a層】
15. N50 泥 シルト質細砂 2.5G71 明腐敗 シルト-細砂のブロック含む【第3a】
16. N30 腐敗 シルト質細砂 中～粗砂多量含む【第3aあるいは第3b】
17. 2.5343 腐敗 シルト質細砂 中～粗砂多量含む 灰化物多量混じる【20プロック上の第3a】
18. (上) N30 腐敗 シルト質細砂 中～粗砂多量含む 灰化物多量【24の第3a】  
(下) 2.5361 泥 シルト質中～粗砂【25の第3a】
19. 5B071 明腐敗 シルト-細砂 10R06/1 腐敗 細砂 N30 腐敗 シルト等のブロック土
20. 19と同じ 下に29の小プロック多量含む【26・27・29の第3a】
21. N40 泥 シルト質細砂 中～粗砂 小礫多量含む【第3-1b層】
22. 2.5343 腐敗 シルト質細砂 細～粗砂 小礫含む【第3-1b層】
23. 2.5353 明腐敗シルト-細砂 粗砂に24の小プロック多量混じる【第3-1b層】
24. 10R05/1 腐敗 シルト-細砂 10R06/1 腐敗 細砂 N30 腐敗 シルト等のブロック土
25. 10R05/1 腐敗 シルト質細砂 中～粗砂多量含む【第3-2a層】
26. 5B071 明腐敗 シルト【第3-2b】
27. 5B071 明腐敗 細砂質細砂 粗砂多量含む【第3-2b】
28. 5B071 明腐敗 細砂質細砂 粗砂多量含む【第3-2b】
29. 5B071 明腐敗 細砂質細砂 粗砂多量含む【第3-2b層】
30. N30 腐敗 シルト【第3b層】
31. 5B51 腐敗 シルト【第3b層】

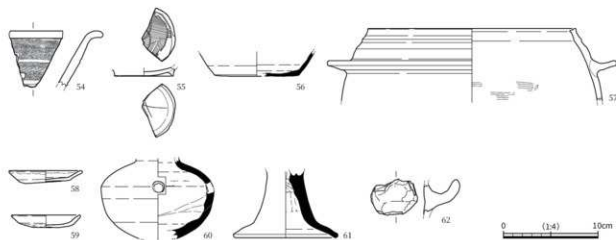


図21 4トレンチ 出土遺物

たが、南寄りで複数のビットや溝、落込などを検出するとともに、地震による土層の変形が各所で認められた。第2面、第3面ではほかの調査区でもみられる土層層の上面を遺構面として検出し、北に緩やかに傾斜する地形を認めたが、遺構はみられなかった。

**土層序** 現代の盛土ならびに攪乱層が厚くあり、その下に北側が一段下がる現代の作土層（第1層）がある。調査区北半分ではその直下に大型の落込（1落込）があり、調査深度以下にまで続く。この部分は掘削時から湧水が著しく、掘削直後に調査区壁の崩落が発生したため、十分に観察できなかったが、中世以降の土器細片を含んでいた。落込以南の範囲では、第1層の下に緩やかな攪拌を伴う土層層（第2層）があり、これに上部を削られる形で、第3a層がある。第3a層を除去した面を第1面とし、ビットや溝を確認したが、第3a層を含めて土層の変形が著しく、遺構が変形による土層の落込か、判断に迷うものが多い。第3a層のベース（第3b層）はほかのトレンチではおおむね堆積層となるが、ここでは上位に小型の、下位に大型のブロック土で構成される層が多く分布する。このブロック土は層相から判断して第3層以下を掘削した際の発生土と考えられ、1落込にも切られていることから、1落込の掘削以前に、第3層以下を掘削するような状況があったこととなる。断定は難しいものの、このブロック土は第3層が形成されている段階に掘削、発生したものと考えられ、1落込の下部に重複して、中世ないしはそれ以前に掘削された大型の遺構が存在した可能性がある。また、ブロック土に覆われた土層層は古墳時代以降の土器を含んでおり、3トレンチの第4a層よりやや高い位置にあって、北の5トレンチで第3a層とした土層層に連続する可能性が高い。不明瞭な部分を残すが、第3層中の一段階古い土層層と考え、第3-2a層とした。この第3-2a層上面を第2面とし、以下は地震による変形箇所を含みつつも、おおむね南から北への傾斜をもつ土層層と堆積層の互層となる。第4層は明確な土層層としては認識できなかったが、第3-2b層とした堆積層の重なりに収斂されていると考えられる。T.P.+3.4m付近で現れる黒色土層を第5a層とし、その上面を第3面とした。第5a層以下は部分的な確認にとどまったが、堆積層が続き、大阪層群に相当する基盤層には達しなかった。

**遺構** 第1面では10基余りのビットと溝、落込を確認した。ビットには径が0.2m台のもの、0.4～0.5m程度のものがあり、深さは小型のもので0.2mまで、大型のものでは0.4mに達するものがある（5ビット）。埋土も大きく3つに分類でき、柱痕跡を残すものやベース層のブロックを含むもの（5ビット）、根石や礎板の可能性のある板材を含むもの（5、11、12ビット）がある。また炭化物粒を含

むものが多い。ピットの多くは柱穴の可能性が高いと考えられるが、調査面積が狭く、有為な柱穴の組み合わせは不明である。溝、落込は柱穴群に重なるように分布し、いずれも不整形かつ輪郭が不明瞭である。深さは0.2～0.4m程度であり、地震による変形で形成された可能性もある。各遺構からは土器細片が出土し、古墳時代から中世にかけてのものがあるが、多くは瓦器碗や土師皿の細片であった。

**出土遺物 (図21)** 4トレンチから出土した遺物のうち、図示したものを図21に示した。54～57は第3層より上層に含まれていたものである。54は須恵器器台の口縁部片で、外面に精緻な波状文が認められる。55は瓦器碗だが黒色処理が認められず、暗文に先行する見込み部のハケ目がよく観察できる。また、底部外面には×形に線刻が施されている。56は須恵器器環の底部で奈良時代のものの可能性がある。57は瓦質土器の羽釜で13世紀代のもと考えられる。58,59は第3a層出土の土師器皿で、58は13世紀後半の灯明皿、59は14世紀に下るものと考えられる。60の須恵器器胎は1落込と第3b層

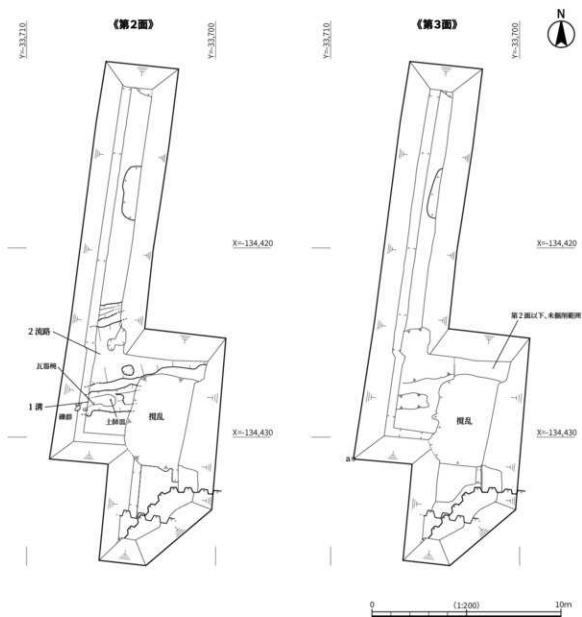


図22 5トレンチ 平面図



出土のものが接合した個体で、体部に比して頸部が狭い。外面には突帯や波状文などの装飾的要素がみられず、初期須恵器の可能性が高い。61は第4a層中に含まれていた高環で(図19)、脚の一部と環部を欠損する。土師器に一般的な形状をもつが、当初より須恵器として焼成された可能性が高い。同様の高環は桶遺跡など、寝屋川市域でも北寄りに分布する遺跡から出土する傾向のあることが指摘されており(濱田2001、小林2011)、北河内地域で生産された初期須恵器と考えられる。62は9ピットから出土したもので、古代の鍋もしくは甕の把手で、舌形に類するものである。

**小結** 4トレンチは3トレンチ同様、尾根間の谷地形の内部にあたり、弥生時代以降の埋積により土層が形成されたと考えられる。第3-2a層とした土壌層中に初期須恵器高環の脚部(図21-61)が正位置で出土しており(図19)、意図的な埋置とは断定できないが、第3-2a層の形成時期が古墳時代中期以降となることを示している。上述のように北河内地域に特徴的とされる須恵器高環である点は注目され、60の甕が初期須恵器であれば、周辺地域での5世紀前半にさかのぼる活動痕跡とみることができる。第3-2a層の形成後、調査区北寄りの、地形がより低くなる箇所に溝、ないしは大型の土坑が掘削された可能性が高く、その際の発生土の累積が明瞭に認められた。ブロック構造を良く残しているところから掘削直後にさらに埋積が進み、第3a層の形成をみたと考えられる。第3a層下面にあたる第1面では一時的な柱穴などの掘削も行われ、6トレンチで検出した集落域の形成に呼応する可能性もある。ただし湧水が著しく、地形的に安定した土地とは言い難いことから、集落の形成として評価するには躊躇するところである。その後さらに埋積が進み、第2層が形成されたのち、調査区北半に大型の落込(1落込)が掘削されたものと考えられる。各層からは、古墳時代から中世までの遺物が比較的多く出土しているが、いずれも細片であり、3トレンチ同様、この地での活動痕跡や堆積の時期を示すというよりは、近隣地での土地利用の諸段階を示唆するものと考えられる。

## 第6項 5トレンチ

**概要** 4トレンチの北、14m離れた位置に設けたトレンチで、既設構造物による攪乱を避けたため、変則的な形状となった。調査面積は140㎡である。調査前は既存の建物が撤去され、一部が舗装された状態であり、調査範囲内にも既存建物の地下構造による攪乱が随所にみられ、鋼矢板が錯綜する南端の部分は機械掘削のみ行い、調査掘削は実施していない。ほかのトレンチ同様、第1面、第2面、第3面を把握したが、第1面は上層の堆積に伴う浸食痕のほかは遺構が皆無であり、第2面においても、上層から掘削された溝状遺構(1溝)と流路状の浸食(2流路)がみられたのみである。第3面は黒色土壌の上面にあたり、ゆるやかに南に傾斜する平坦面を検出したが、遺構はみられない。堆積層中と流路から比較的多くの遺物の出土があり、1溝には意図的に埋置されたと考えられる土器がみられた。

**土層序** 厚い現代の盛土と攪乱層の下に、北に段差をもって下がる現代作土からなる第1層がある。第1層の下にみられる第2層は一部に土壌化した部分を認めるものの、総じて堆積層としての層相を呈している。調査区中央南寄りでは、ほぼ複雑な砂層の切り合いに変化し、洪水砂の堆積とも呼べる状況となる。これら堆積層に覆われた相対的に安定したシルト層を第3a層とし、上面を第1面として精査したが、遺構はみられない。第3a層自体も調査区中央南寄りでは砂を主体とした流路状の堆積層へと側方変化し、第4層、第5層を下刻する。第3層に覆われたシルト層が第4a層で、上面が第2面となる。なお、第2面で確認した1溝は第3b層の堆積中に掘削されたもので、第3b層は調査区南寄りでは確認した2流路を埋める堆積物と一連である。以下、土壌層と堆積層の互層が、第4a層、第4b層、第5

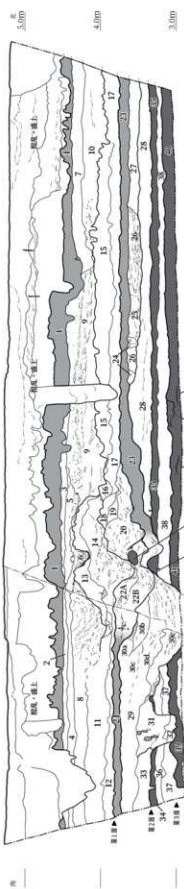


図 23 5 トレンチ 土層断面図

1. N30 腐敗、シロクサ質腐植層、中～粗粒砂多量を含む、小礫多量を含む【層 1層】  
 2. N40 腐敗、シロクサ質腐植層、中～粗粒砂多量を含む【層 1層】  
 3. N40 腐敗、シロクサ質腐植層、中～粗粒砂多量を含む【層 1層】  
 4. 2.53714 腐敗、シロクサ質腐植層、中～粗粒砂多量を含む【層 2層】  
 5. 100531 腐敗、シロクサ質腐植層、中～粗粒砂多量を含む【層 2層】  
 6. 101954 腐敗、シロクサ質腐植層、中～粗粒砂多量を含む【層 2層】  
 7. 53521 腐敗、シロクサ質腐植層、粗粒砂・小礫多量を含む、しまり【層 2層】  
 8. 2.53623 同上1層、シロクサ質腐植層、粗粒砂・小礫多量を含む、しまり【層 2層】  
 9. 2.53761 同上1層、シロクサ質腐植層、粗粒砂・小礫多量を含む、しまり【層 2層】  
 10. 56214 腐敗、シロクサ質腐植層、中～粗粒砂・小礫多量を含む【層 2層】  
 11. 2.53771 腐敗、シロクサ質腐植層、中～粗粒砂・小礫多量を含む【層 2層】  
 12. 2.53771 腐敗、シロクサ質腐植層、中～粗粒砂・小礫多量を含む【層 2層】  
 13. 2.53771 腐敗、シロクサ質腐植層、中～粗粒砂・小礫多量を含む【層 2層】  
 14. N40 腐敗、シロクサ質腐植層、粗粒砂・小礫多量を含む【層 2層】  
 15. 56214 腐敗、シロクサ質腐植層、粗粒砂・小礫多量を含む【層 2層】  
 16. 56214 腐敗、シロクサ質腐植層、粗粒砂・小礫多量を含む【層 2層】  
 17. 56513 腐敗、シロクサ質腐植層、粗粒砂・小礫多量を含む【層 2層】  
 18. 56614 腐敗、シロクサ質腐植層、粗粒砂・小礫多量を含む【層 2層】  
 19. N40 腐敗、シロクサ質腐植層、粗粒砂・小礫多量を含む【層 2層】  
 20. N40 腐敗、シロクサ質腐植層、粗粒砂・小礫多量を含む【層 2層】  
 21. N40 腐敗、シロクサ質腐植層、粗粒砂・小礫多量を含む【層 2層】  
 22. A: N40 腐敗、シロクサ質腐植層、中～粗粒砂・小礫多量を含む、B: 同上1層
- 【層 30層】腐敗、シロクサ質腐植層、中～粗粒砂・小礫多量を含む【層 30層】  
 23. 53541 腐敗、シロクサ質腐植層、粗粒砂・小礫多量を含む【層 30層】  
 24. N40 腐敗、シロクサ質腐植層、粗粒砂・小礫多量を含む【層 30層】  
 25. N40 腐敗、シロクサ質腐植層、粗粒砂・小礫多量を含む【層 30層】  
 26. 2.53761 腐敗、シロクサ質腐植層、粗粒砂・小礫多量を含む【層 30層】  
 27. N40 腐敗、シロクサ質腐植層、粗粒砂・小礫多量を含む【層 30層】  
 28. 2.53761 腐敗、シロクサ質腐植層、粗粒砂・小礫多量を含む【層 30層】  
 29. N40 腐敗、シロクサ質腐植層、粗粒砂・小礫多量を含む【層 30層】  
 30. 【層 30層】腐敗、シロクサ質腐植層、粗粒砂・小礫多量を含む【層 30層】  
 a: N40 腐敗、シロクサ質腐植層、粗粒砂・小礫多量を含む【層 30層】  
 b: N40 腐敗、シロクサ質腐植層、粗粒砂・小礫多量を含む【層 30層】  
 c: N40 腐敗、シロクサ質腐植層、粗粒砂・小礫多量を含む【層 30層】  
 d: N40 腐敗、シロクサ質腐植層、粗粒砂・小礫多量を含む【層 30層】  
 e: 2.53772 腐敗、シロクサ質腐植層、粗粒砂・小礫多量を含む【層 30層】
- 2.53761 腐敗、シロクサ質腐植層、粗粒砂・小礫多量を含む【層 30層】  
 31. 31520 腐敗、シロクサ質腐植層、粗粒砂・小礫多量を含む【層 30層】  
 32. 59711 明度低、シロクサ質腐植層、粗粒砂・小礫多量を含む【層 30層】  
 33. 2.53541 腐敗、シロクサ質腐植層、粗粒砂・小礫多量を含む【層 30層】  
 34. 2.53541 腐敗、シロクサ質腐植層、粗粒砂・小礫多量を含む【層 30層】  
 35. 101954 腐敗、シロクサ質腐植層、粗粒砂・小礫多量を含む【層 30層】  
 36. 101954 腐敗、シロクサ質腐植層、粗粒砂・小礫多量を含む【層 30層】  
 37. 59711 明度低、シロクサ質腐植層、粗粒砂・小礫多量を含む【層 30層】  
 38. 59614 腐敗、シロクサ質腐植層、粗粒砂・小礫多量を含む【層 30層】  
 39. N40 腐敗、シロクサ質腐植層、粗粒砂・小礫多量を含む【層 30層】  
 40. N40 腐敗、シロクサ質腐植層、粗粒砂・小礫多量を含む【層 30層】  
 41. 30711 明度低、シロクサ質腐植層、粗粒砂・小礫多量を含む【層 30層】  
 42. 101971 明度低、シロクサ質腐植層、粗粒砂・小礫多量を含む【層 30層】

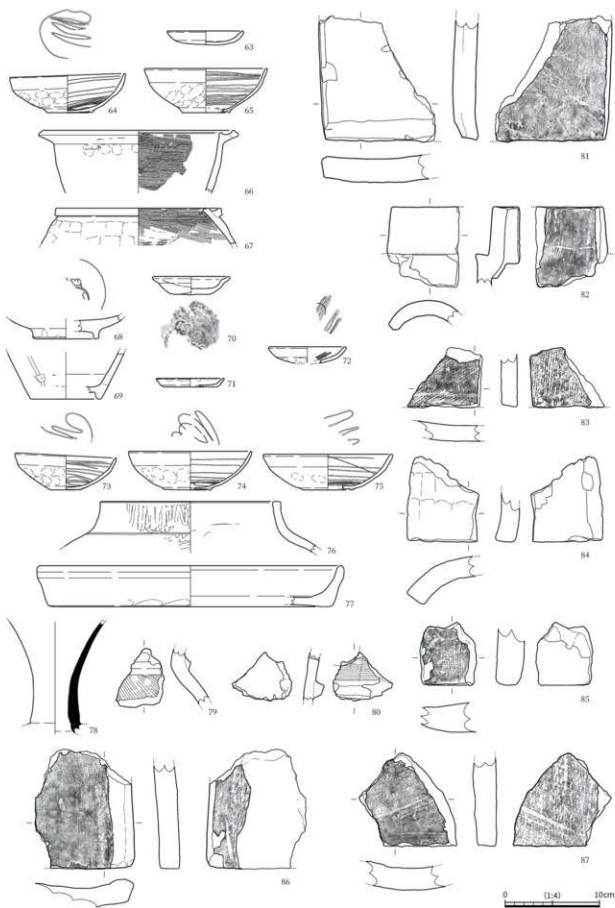


図24 5トレンチ 出土遺物

a層、第5b層と続き、第5a層上面を第3面としたが、遺構はみられない。第5層以下については実測図や写真による記録は残せなかったが、部分的な掘削によりT.P.+2.44mで基盤層の可能性が高い砂層の上端を確認した。

**遺構** 第2面で上層から掘り込まれたと考えられる溝（1溝）の下部と、それと方向を同じくする流路（2流路）を検出した。1溝は調査区西壁の土層断面の精査で第3b層の途中から切り込むものと判断したが、土色土質の境界が極めて不明瞭で、第3b層の掘削段階では把握できなかったものを、第2面で確認したものである。第2面での幅は1.2m、深さ0.3mであるが、土層断面で確認した規模では上端幅1.5m、深さ0.5mを測り、底面の凹凸が著しい特徴がある。また、埋土上位に礫がまとまって含まれている箇所もあった。底付近からはレベルをやや違って完形の瓦器椀（図24-64）と土師器皿（図24-63）が出土した。土師器皿が底付近にあり、瓦器椀はやや上位に位置する。いずれも正位置の状態で出土しており、人為的に置かれたものと考えられるが、溝底面からは浮いており、溝の掘削後の滞水、シルトの堆積環境の中で置かれたものであろう。ほかに瓦器椀、土師器皿の細片が出土している。1溝のすぐ北に同じ方向に流れる2流路がある。流路としたが、第3b層の堆積環境の中で最も流水が著しい箇所による下刻の痕跡と考えられる。内部から中世段階の土器細片を主体に、瓦や瓦質土器、陶器などのやや大きめの破片も出土している。1溝と2流路は形成段階が異なり、切り合い関係では1溝の埋没後に2流路に続く第3b層の上位が切る関係にあるが、出土遺物に大きな時期差はみられない。ほかに、側溝掘削中に礫を含むピットがあることを確認したが、詳細な記録はできなかった。埋土の様相からは第3b層中から掘り込まれた遺構の可能性が高い。

**出土遺物（図24）** 5トレンチから出土した遺物のうち、図示し得たものを図24に示した。ほかのトレンチと比べ、相対的な出土量は多い。63、64は1溝に埋置された完形の土器で、土師器皿、樟葉型瓦器椀である。一部を欠損するが打ち欠きなどはみられない。65の瓦器椀を併せ、13世紀中葉～後半のものと考えられる。66、67は瓦質土器の鍋、羽釜で、破片資料ではあるが器壁の遺存状況は良く、煤の付着も認められる。68～87は層出土遺物で、おおむね第3層からの出土となる。68は青磁碗の高台で見込みに刻劃文が認められる。69は輸入陶器の四耳壺底部と考えられ、体部下半の目跡と黒褐色の釉垂れが確認できる。浙江省系か。70は陶器の皿で底部は糸切り、外面の一部を除き灰褐色の釉がかかる。古瀬戸に属するか。71は土師器の灯明皿、72は瓦器の皿である。73～75は樟葉型瓦器椀で13世紀後半のものか。76は瓦質土器の壺で、頸部外面を縦方向のミガキで整える。77も瓦質土器で、平底の浅鉢である。78は奈良時代の須惠器長頸壺の頸部で、焼けぶくれが目立つ。79、80は円筒埴輪で、79は朝顔形の頸部と考えられる。タテハケを断面三角形の突帯貼り付けのヨコナデが切る。80は断面台形の突帯と円形の透かしが一部残る破片で、外面の二次調整にB種ヨコハケを施す。静止痕はやや右に傾いており、Bd種の可能性があるが、残存部分が少ないため断定はできない。ともに焼成は堅緻で窯窯焼成と考えられる。81～87は瓦で、平瓦と丸瓦がある。図示していない細片を含め、軒瓦は出土していない。時期を限定できる個体はないが、図示したものは凹面に布目を残し、凸面に縄目タタキを残すものが多い。81の凸面には方形に×印の圧痕が認められ、中世のものか。写真のみの掲載としたものには陶器（図版29-146～149）、瓦（150）、須惠器器台（151）、韓式系土器の可能性のある瓦質土器（152）、円筒埴輪（図版30-153～156）があるが、ほぼ第3層出土の細片である。146は黒く発色する釉がかかる大型の甕の肩部と考えられ、横位に櫛描文が2条めぐる。147も類似するもので、やや小型で櫛描文の上部から釉だれが流れる。148は甕口縁部、149は瓶子の体部下半から

底部で、高台をもたない平底である。陶器類の産地について、厳密に同定できていないが、146、147が備前、148が常滑、149は瀬戸と考えられる。

**小結** 5トレンチも4トレンチ同様、尾根間の谷地形の内部にあたり、弥生時代以降の埋積により土層が形成されたと考えられる。各層とも堆積層の色合いをより強くみせ、流路状の下刻がみられるなど、谷の最深部にあたると考えられる。第3b層には第5層のブロック（偽礫）を含むなど、一時の堆積環境が相当激しいものであったことが推測できる。第3面がゆるやかながら南に下がる傾斜を持っていることから、谷の最深部は4トレンチと5トレンチの間にあると考えられる。また、2流路の形成、すなわち第3b層の堆積以降、第3a層、第2b層と堆積に伴う下刻の位置が次第に北側へ移動する様相がみられることも特徴といえる。出土遺物には古墳時代から中世までの各時期のものが混在し、相対的に出土量が多いことが特徴といえる。これは近接地の土地利用が活発であった可能性とともに、谷の流水が集約する環境によるものとも考えられる。特に複数の時期のものを含む可能性が高い埴輪の細片が出土していることは、近隣地に古墳が存在した可能性のほかに、谷の最奥部よりさらに上部丘陵上での古墳の存在を反映していることも想定しておきたい。谷の埋積の細かなタイムテーブルはもとより知ることはできないが、少なくとも13世紀後半の一時期に、2溝の掘削という形で谷内部の湿潤な土地への働きかけが行われたことがあきらかとなった。溝の方向が谷のそれと一致することからは、谷内部の排水を意図したものと考えられ、6トレンチで確認した居住域の廃絶以降とする想定に従えば、谷の埋積という微地形の平坦化に応じた、居住域から生産域への土地利用の変化を示す可能性もあろう。

## 第7項 11トレンチ

**概要** 調査期間中に調査対象として加えられたトレンチで、名称を11トレンチとしたが、5トレンチと6トレンチの間に位置する調査区である。既存建物の地下構造の範囲を避けた狭小な調査区で、調査面積は49㎡である。ほかの調査区同様、第1面、第2面について面的な調査を行ったが、第1面には遺構はみられなかった。第2面ではわずかに遺構が認められた。湧水が著しく、調査区が狭いこともあって、第2面以下については掘削を行わず調査を終えた。

**土層序** 5トレンチと同様の層序を示し、中世以降の堆積層を主とする第2層の下部に現れた土壌層（第3a層）の上面を第1面とした。第3層以下にも遺物を含む堆積層の重なりが認められ、それらに覆われた比較的安定した堆積層（第4a層）上面を第2面とした。第4a層以下は確認していないが、おそらく第5層を含む、堆積層と土壌層の重なりがあり、基盤層はさらに深いものと考えられる。

**遺構** 第1面は精査したものの遺構はみられなかった。第2面では、東西方向の溝と柱穴を数基確認した。第3b層の掘削中から柱根ないしは杭材の残欠と思しき木片が認められていたことから、これらは第3b層中から掘削ないしは打ち込まれた柱穴、もしくは杭跡が第2面に達した痕跡と考えられる。西壁土層断面にも柱穴と考えられる部分が認められる。1溝は5ト

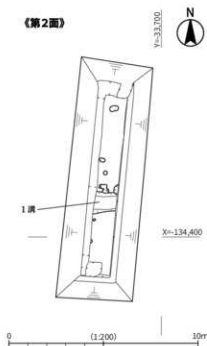
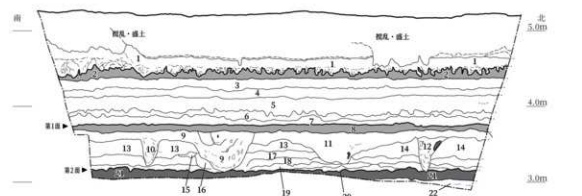


図25 11トレンチ 平面図



西壁土層断面図

1. N6.0 灰 シルト 細一中粒 粗粒砂多く混じる  
下部に2.5GV7(3) 灰白 シルトが現れたラナシタ状に入る。ロードキ+ストか【第1層を細く掘れば】
2. N3.0 灰 シルト質細粒砂 中一粗粒砂多く混じる。多量腐葉土【第1層】
3. SNG(1) 黄灰 シルト質細粒砂 中一粗粒砂多く混じる【第2層】
4. IGG(1) 明緑灰 シルト+無細粒砂 粗粒砂多く混じる【第2層】
5. IGG(1) 明緑灰 シルト+無細粒砂 粗粒砂多く混じる  
上部に2.5GV(3) オリーブ黄 (No.7) が混入状に入る【第2層】
6. IGG(1) 明緑灰 シルト と N6.0 灰 シルトの混層【第2層】
7. N6.0 灰 シルト+無細粒砂 粗粒砂多く混じる【第2層】
8. N9.0 灰 シルト質細粒砂 中一粗粒砂多く含む。  
中に2.5GV(1) 明緑灰 シルトが混入プロック状に入る【第3a層】
9. N5.0 灰 (流りや不明) シルト質細粒砂 粗粒砂多く含む  
18 あるいは 21 に似たシルトプロック含む【第3b層】
10. N5.0 灰 中一粗粒砂 に 2.5GV(1) 明オリーブ 灰 シルトプロック混じる  
粗粒砂→小粒砂多く混じる【第3層一両面】
11. N5.0 灰 シルト質細粒砂 粗粒砂→小粒砂 シルトプロック含む  
径3cm 人の鎌含む 炭化物砂含む【第3層一両面】
12. N5.0 灰 無細粒砂 に 2.5GV(1) 明オリーブ 灰 シルトプロック混じる  
径 10 ~ 15cm 人の鎌含む しまり悪い【第3層】
13. IGG(1) 暗青灰 無細粒砂→細粒砂 粗粒砂→小粒砂多く含む【第3a層】
14. N5.0 灰 粗一中粒砂 粗粒砂→小粒砂多く含む【第3b層】
15. IGG(1) 暗青灰 シルト質無細粒砂→細粒砂【第3b層】
16. N6.0 ~ N4.0 灰 無細粒砂のプロックの混入 炭化物砂含む しまり悪い【第3b層】
17. IGG(1) 暗青灰 シルト質無細粒砂→細粒砂【第3層】
18. 2.5GV(1) 黄灰 無細粒砂 有機質多く含む しまり悪い【第3b層】
19. IGG(1) 灰白 細一粗粒砂 ラナシタは残らない【第3b層】
20. SNG(1) 灰 シルト 粗粒砂多く混じる。21 と一様か【第3層】
21. IGG(1) 暗灰 シルト+無細粒砂 有機質含む しまり悪い【第3a層】
22. 2.5GV(1) 灰白 粗粒砂 21 との境界が不明瞭【第3b層】

図 26 11 トレンチ 土層断面図

レンチの1溝に類似した東西方向のもので、平面的な検出はできなかったものの、土層断面の観察から第3b層から掘りこまれ、その最深部が第2面に痕跡を残したものと考えられる。湿地地形の排水を目的とした溝の掘削と考えられるが、ほぼ第3b層と同様の堆積物で埋没しており、離水していない状況で掘削された可能性が高い。

出土遺物(図27) 5トレンチと比べると遺物の出土頻度は低く、ほとんどが堆積層である第3層から出土した土器の細片である。図示し得たものを図27に掲載した。88は青磁碗の底部片で、高台端部は露胎し、見込み部分には草花文と思われる劃花が認められる。12世紀後半代のものか。89、90は土師器皿で13世紀後半以降のものか。91は小型砥石の残欠で、石材は流紋岩。残存部の四辺とも使用され円滑であり、片減りが著しい。92~94も土師器皿。13世紀後半以降のものか。95は平瓦で凹面に布目、凸面に縄目タタキを残す。96は砥石かと推測する石片で、上面が円滑であり断面形状がレンズ状を呈する。石材は花崗閃緑岩ないしは斑レイ岩と考えられ、硬質で黒色を呈する。ほか、写真のみの

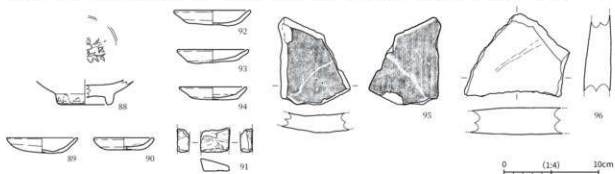


図 27 11 トレンチ 出土遺物

掲載としたものに図版 29 - 157 とした瀬戸の卸皿、図版 30 - 158 とした円筒埴輪の突帯付近の細片がある。88 ~ 91 は第 3a 層、92 ~ 96 はそのベースとなる第 3b 層からの出土となるが、全体的にみて、ほぼ近い時期の遺物が混在している。おおむね周囲から谷内部へと流れ込んだ遺物と考えられる。

**小結** 11 トレンチも隣接するトレンチ同様、基盤層が深く下刻された谷の内部にあたり、弥生時代以降の埋積の過程を示しているものと考えられる。その出土遺物から 11 トレンチの埋積時期を段階的に把握することは難しいが、ある程度谷が埋没した中世段階に、溝の掘削や杭の打設といった働きかけが行われたものと考えられる。ただ、第 2 層が厚い堆積層を主にしている状況からみて、これによって耕地としての利用へスムーズに移行した可能性は低く、依然、谷内部の湿地的な環境が継続した可能性が高い。また、南側の 5 トレンチがこの谷の最深部付近にあたると考えられることから、11 トレンチは谷の北斜面に位置すると想定され、集落遺構が確認された 6 トレンチにむかって基盤層が上昇していく可能性が高い。ただし集落に近い位置にあっても、5 トレンチより相対的に遺物量が少ないことは、谷出土の遺物が単純に隣接地の土地利用を反映しているとは言えないことを示している。5 トレンチは谷の深部にあって、激しい削平と堆積活動によって、丘陵上部のより広範な範囲の遺物が流入する環境にあったことを、11 トレンチの調査が間接的に示していると言える。

## 第 8 項 6 トレンチ

**概要** 今回の調査範囲のほぼ中央にあたり、11 トレンチの北に隣接する南北に長い方形の調査区で、調査面積は 208 m<sup>2</sup> である。試掘調査において基盤層上面で複数の遺構を確認した範囲を含む。基盤層上面が第 1 面とした遺構面であり、ほかの調査区での第 1 面に対応する。第 1 面で中世段階の遺構をまとめて確認した。

**土層序** 現代の盛土層の直下に市街地化以前の作土層（第 1 層）、その下部に中世以降の遺物を含む作土層と堆積層の重なり（第 2 層）、それに覆われる遺物を多く含む土壌層（第 3a 層）がみられ、これを除去することで基盤層となる黄褐色シルト層が現れる。しかし安定した基盤層がみられる範囲は南北 20 m ほどであり、これ以北、以南とも基盤層が次第に砂層に変化するとともに、深度が増し、調査掘削の深度では確認できない深さとなる。6 トレンチ南寄りでは深くなった基盤層との間に土壌層と堆積層が複数みとめられ、11 トレンチにつながる谷地形を呈している。調査区西壁を中心に土層序を精査すると、基盤層の高まり上にある褐色の土壌層と、調査区南寄り、基盤層が深く下がる部分で現れる第 3a 層は一連のものではない（図 29）。基盤層上の土壌は南寄りで厚さを減じ、上部の堆積層に削平を受けている可能性が高い。また、基盤層上部の土壌層の形成段階には、南寄りの谷

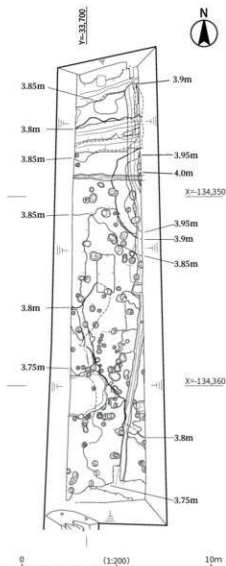


図 28 6 トレンチ 第 1 面 等高線図

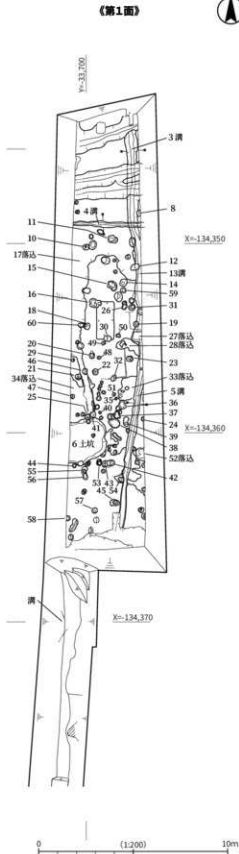
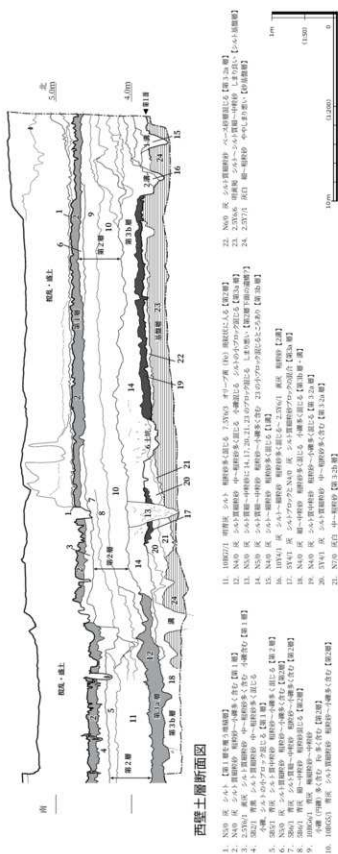


図29 6トレンチ 平面図 土層断面図



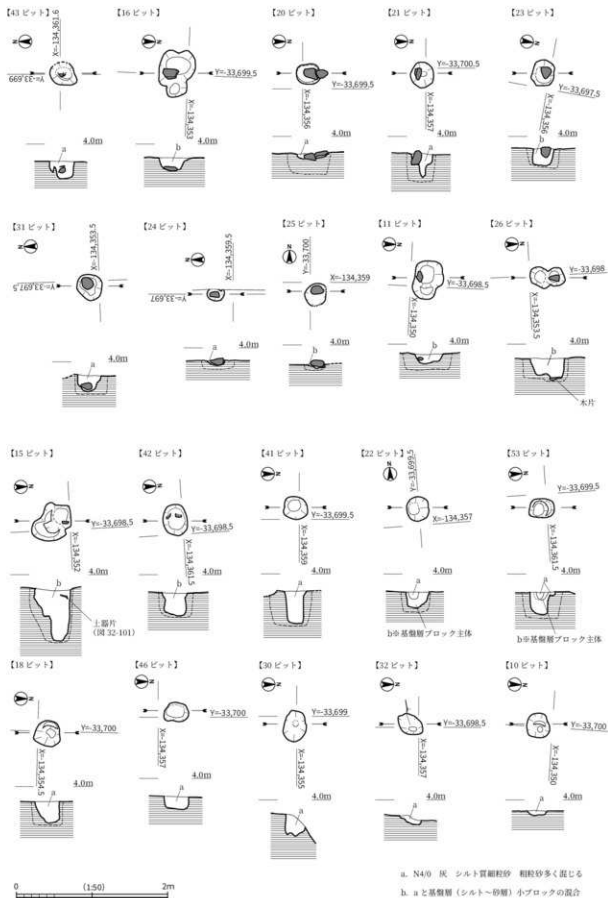


図 30 6 トレンチ 遺構 平・断面図 (1)

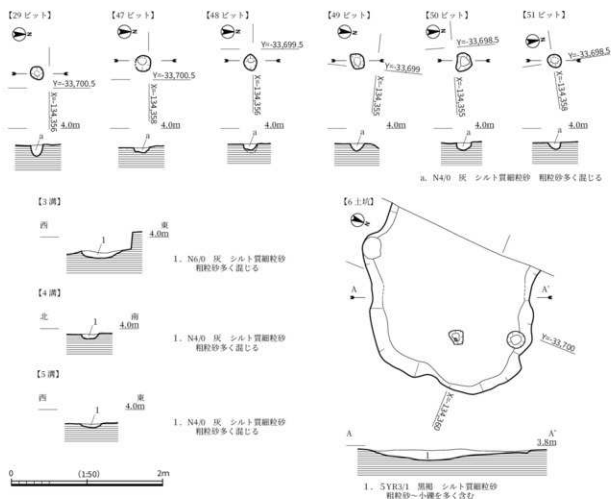


図31 6トレンチ 遺構 平・断面図(2)

部の堆積も進んでいることもあきらかである。従って、当時の地表面としての第1面は、土壌層の上面からある程度埋積が進んだ谷内部へと連続するものの、遺構検出面としての第1面（基盤層上面）は、谷部の第1面より下位につながるものとなる。このため、基盤層上部の土壌を第3-2a層として区別しておきたい。

**遺構** 微高地の北端、南端には上層（第2層）から掘削された東西方向の溝がみられ、これを境に地形の下がる部分には遺構が分布しない。一方、その間にあたる安定した基盤層上面では柱穴が集中して分布するほか、土坑、溝など、およそ60基前後の遺構を確認した。

1溝、2溝は調査区北端で検出した東西方向の溝で、ゆるやかなV字状の断面形状をもつ。どちらも第3a層より上部の第2層中から掘削された溝で、両者の切り合い関係では、1溝の埋没後に2溝がやや南に掘削されたものとなる。1溝からは滑石製石鍋の細片、2溝からは青磁片が出土しているほか、瓦、中世段階の須恵器、土師器、瓦質土器の細片がいずれの溝からも出土している。4溝も1・2溝と同じ方向に流れる小溝で、第3a層を埋土にする。3溝、5溝は1・2・4溝と交差し、ゆるやかに弧を描きながら南北方向に延びる溝で、当初は調査区中央付近での連続が把握できず、異なる遺構番号を付したが、最終的には連続する同一の溝であることを確認した。4溝とは埋土が類似するものの、4溝に切られている関係にある。古墳時代から中世の遺物を含むが、比較的残りの良い瓦器椀（図32-100）が5溝とした範囲から出土しており、溝の機能時期の一端を示している可能性がある。6土坑は遺構分

布城の南寄りにみられるやや規模の大きい土坑で、調査区の西へ延びる。検出面では幅、ないしは径が2 m程度であるが、深さは0.16 mと浅い。西壁土層断面からみて、第2層下面の遺構であると考えられ、第3a層下面で確認できる遺構より段階的に新しい。埋土から中世段階のものを主とする土器細片が出土している。

比較的集中してみられたピットは50基弱に遺構番号を付したが、ごく浅く明確な遺構とは考え難いものや、自然地形とみた方が良いものもあり、おおむね40基を人為的な遺構と認識している。規模で分類するならば径が0.15～0.25 m程度の小型のもの、0.30～0.45 m程度の中型のもの、0.5 mを超える大型のものに区分でき、そのうち中型のものが20基以上と最も多い。検出面からの深さでは0.1 m以下のものが最も多く、次いで0.3 m程度にも分布のピークがある。また、41ピットは深さ0.46 m、15ピットは深さ0.7 mと、ほかのピットとは隔絶する。埋土は大きく3種類に分類でき、濃い灰色を呈するシルトを埋土とするものが大多数を占める。また、少数ながら第2層の堆積層を埋土とするものには、ほかのトレンチでも認められたような、集落廃絶後の土地利用に伴う杭跡などが含まれているとも考えられる。柱穴内部に円礫が含まれているものが8基あり、基本的に柱の沈降を防ぐための根石的なものと考えるが、礫が柱穴の底に置かれるものだけではなく、柱穴埋土上部に位置するものもある。また、15ピットには瓦質土器盤の底部破片(図32-101)と転用材と考えられる木製品(図32-117)が重ねられていた。礎板として用いられた可能性がある。ほかの柱穴からも遺物の出土はみられるが、須恵器、土師器、黒色土器、瓦器などの細片がほとんどで、意図的に埋納されたものは認められない。ピット群は掘立柱建物を構成する柱穴を含んでいると推測されるものの、調査範囲が限られていることから、上述の分類を参照してもなお、明確な建物遺構の復原には至っていない。しかしながら、周辺のトレンチ出土遺物をもて、一般的な集落遺跡と同様の日常雑器類の出土が目立つことから、おおむね集落遺構と把握して差し支えないものと考えられる。

**出土遺物(図32)** 出土遺物は土器細片が主体であり、土師器、須恵器、瓦器、輸入陶磁器などのほか、滑石製の石鍋片も出土している。おおむね13世紀頃の一般的な集落遺跡から出土する遺物の組成と共通する日常雑器類ということが出来る。図化し得たものを図32に示した。97～101、117は遺構出土、102～116は層出土のものである。97～99は1溝出土で、98は滑石製の石鍋の体部片である。100は5溝出土の瓦器椀で、13世紀後半の樟葉型。101は瓦質土器の盤で、117の転用材とともに15ピットから出土した。102～116は主に第3層から出土したもので、第3a層出土のものは第1面に伴う、いわゆる遺物包含層出土遺物となる。特徴的なものとしては103の外面に粘土紐の接合痕を残す土師器大型椀、106の白磁皿、116の円筒埴輪片があげられ、ほかに瓦質土器の羽釜(102、105)、瓦器椀(107～109)、土師器皿(110～115)、平瓦片(104)がある。瓦器椀は退化した高台がわずかに残る13世紀後半のものと考えられ、集落の時期、ないしはその廃絶時期を示すものと考えられる。土師器皿には「ての字」状口縁のものや口径が10 cmを超えるものがあり、口径7 cm前後の小皿が主体となるほかのトレンチとはやや様相が異なっている。「ての字」状口縁の皿は11世紀代のものと考えられ、やや古相の遺物群といえる。写真のみ掲載した遺物には、図版28-159の瓦器小壺の底部、160～162の黒色土器椀の底部片、163の山茶碗と考える須恵器底部片がある。160～162の黒色土器は第3a層、第4a層出土のもので、ほかに遺構出土のものもあり、細片の出土も相対的に多い。年代を限定することは難しいものの、瓦器椀や土師器皿などと比べ、古相を示す土器となる。なお出土遺物として取り扱ったものではないが、柱穴内に用いられていた石材は、おおむね長径15～20 cm程度の垂円礫・垂角礫が主

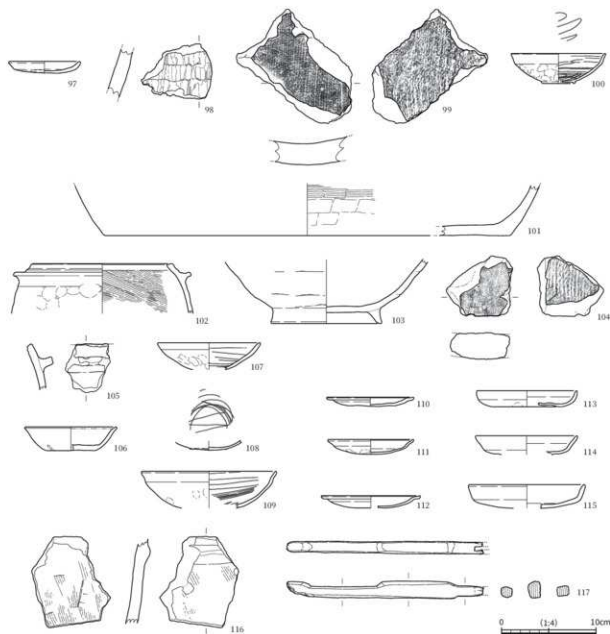


図 32 6 トレンチ 出土遺物

体で、石材は花崗岩、砂岩をはじめ、多様な石材が含まれているようである。

**小結** 6 トレンチの北寄りの部分は、今回の調査範囲では唯一といえる比較的安定した基盤層を確認した部分であり、ピットを中心に明確な遺構がまとまって検出された。建物復原には至っていないものの、これらには建物を構成する柱穴が多く含まれていると考えられる。遺構分布域は枚方丘陵から延びる尾根の先端部分にあたる。微地形としては4溝付近が最も高く (T.P.+4.0 m)、南は58ピット付近でT.P.+3.7 m、北は1溝付近でT.P.+3.85 mと、北と南に緩やかな傾斜をもつ微高地と判断できる。尾根と谷が錯綜する地形の中で、南北を谷に挟まれた相対的に安定した地形が居住域として利用された可能性が高い。ただ、柱穴の内部に礫を納めたものも多くみられ、これらには軟弱な地盤で柱の沈降を防ぐ役割が考えられることから、比較的安定した地形を選んで営まれた集落ではあっても、必ずしも居住域に適した環境ではなかったとも考えられる。また、居住域の広がりについては、東西方向は不明ながら、今回の調査範囲では南北20 m程度の幅に収まる小規模なものと考えられる。

明確に時期を示す遺物の出土がなく、遺構が営まれた年代について断定は難しいものの、最も多くの遺物が帰属する時期が13世紀後半代であり、鎌倉時代後半の遺構群と考えられる。しかし、6トレンチでは黒色土器や「ての字」状口縁の土師器皿など、時期的にさかのぼる土器が相対的に多く出土することもあり、これらの時期の遺構を含んでいる可能性も排除できない。ただし、長期間にわたってまんべんなく遺物がみられるものではないことから、集落が長期間継続したことは考え難い。

## 第9項 8トレンチ

6トレンチの北方、一部を機械掘削したのみで調査を終えた7トレンチを間に挟み、約50m離れた箇所に設けたトレンチである。長方形の調査区で、調査面積は23㎡を測る。調査着手時の状況は、既存構造物を撤去し、仮舗装された状態であった。現地表面より機械掘削を進め、盛土層の下に表れた砂層を除いたシルト層(第3a層)上面を第1面として確認し、調査を終了した。

**土層序** 現代の盛土・攪乱層の下には比較的乱れない砂層があり、その下部にやや厚いシルト～粘土の層がみられる。これらは併せて0.4mほどの厚さで、下部が堆積活動初期の溢流堆積物、上位が砂礫を含んだ流速の激しい堆積物として、一連の堆積活動によるものと考えられる。遺物の出土はなかったが、この直下にみられた土壌が第1層とする現代の作土層と考えられることから、最上位の粘土～砂層も現代の堆積層と考えられる。第1層の下部にはそれほど攪拌を受けていない緩やかな作土層があり、厚さ0.2m程度を測る(第2a層)。その下部には第2a層の母材と考えられる砂層が厚くみられ(第2b層)、その内部は第3a層のブロックが混入するなど、複雑な様相を呈している。おそらく地震による土層序の移動や変形によるものと考えられる。この堆積層下部に南から北に比較的急な傾斜をもつ土壤層がある。層相からみて第3a層に相当する土壌と考えられるが、不自然な傾斜や分断がみられ、ここでも地震による変形が想定される。この層の上面を第1面とし、面的な確認を行った。

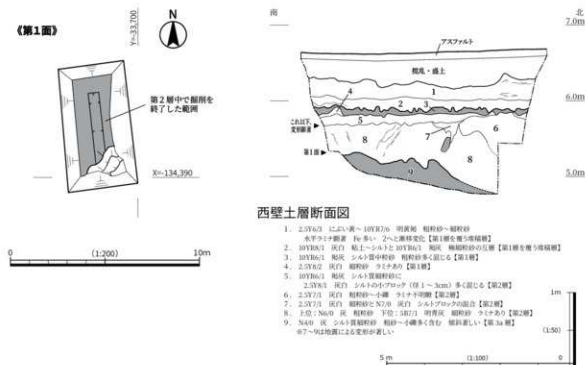


図33 8トレンチ 平面図 土層断面図

**遺構** 第1面には変形による地形の急傾斜がみられたものの、遺構は認められない。

**出土遺物** 8トレンチ出土遺物に図示するものはない。第3a層から土師器ないしは弥生土器と瓦器碗の極細片が6片出土しているのみである。

**小結** 8トレンチは6トレンチの北に位置する谷の内部と考えられ、中世以降の堆積物の一部を確認した。掘削は基盤層には至っておらず、谷の深さも不明ではあるが、現地盤が北に向かって高くなることから、3～11トレンチで確認した南側の谷よりは基盤層も高くなる可能性もある。

## 第10項 9トレンチ

**概要** 8トレンチの北、約30m離れた箇所へ設けた調査区で、既設の地下埋設物と隣接地の進入路を避け、2分割して調査にあたった。合計の調査面積は10m<sup>2</sup>である。調査着手前の状況は既存建物を撤去したのちに仮舗装が施された状態であり、アスファルト層や地下埋設物、コンクリート基礎などの撤去のち、機械掘削を進めた。どちらの調査区とも、盛土層の下に表れた砂層を除いたシルト層（第3a層）上面を第1面として確認し、調査を終了した。

**土層序** 北側の調査区では厚いコンクリート基礎とその基礎地業である碎石層を除去すると厚い洪水砂層が現れる。南側の調査区では現代の盛土層の下部に粘土層を介し、同様の洪水砂層が現れる。どちらも現代の作土層と考える第1層は遺存していないが、洪水砂層が第2b層と考えられ、南側の調査区にみられた粘土層は、8トレンチで第1層の上部にみられた現代の堆積層に対応する可能性が高い。9トレンチでの第2b層は南側の調査区で厚さ1.2m、北側の調査区で厚さ1.3m以上と厚い。この砂層の下部には土壌層の可能性のあるシルト層があり、これを第3a層、この上面を第1面とした。

**遺構** 第1面は北側の調査区では南西方向に下がり、南側の調査区では北側に向かるとい、ともに傾斜をもつ状況が確認された。遺構は認められない。

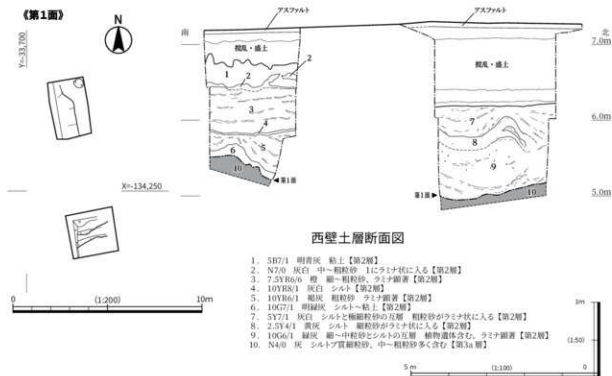


図34 9トレンチ 平面図 土層断面図

**出土遺物** 9トレンチからは遺物は出土していない。

**小結** 9トレンチも8トレンチと同様、埋没微高地の北側に位置する谷地形の内部にあたると思われる。簡易鋼矢板を打設して調査にあたったものの、第2b層をはじめ、各層からの湧水が著しく、第3a層上面以下の掘削は断念し、谷内部の堆積環境や埋積過程、埋積時期を詳しく知ることはできていない。基盤層の深度も不明ではあるが、現地表面の標高が8トレンチより0.5mも高く、6トレンチと比べると1.8mも高い。基盤層の標高は6トレンチ以南よりは相対的に高い可能性もある。

## 第11項 10トレンチ

**概要** 9トレンチの北、約11m離れた箇所に設けた調査区で、今回の調査範囲の最北端にあたる。調査面積は13㎡で、現況は既設構造物が撤去された状態であった。現代の攪乱・盛土層の直下に厚い洪水砂層が現れ、調査区北端側で現地表から2m以上掘り下げたものの、さらに深く続く状況であった。簡易鋼矢板を打設して調査にあたったものの、湧水も著しく、壁面を維持することが難しいことから、これをもって調査を終了した。

**土層序** 現代の盛土層の直下を表れた洪水砂層は、9トレンチとの対照から第2b層と考えられ、確認したところでも厚さ1.8m以上に及ぶ。第2b層の上部には第1層ならびにそれを覆う堆積層は認められなかった。第2b層以下の状況についても不明である。

**遺構** 遺構面の確認には及んでいない。

**出土遺物** 調査区南寄りの、第2b層上部がややグライ化した部分で、近世あるいは中世段階のものと考えられる平瓦細片1点が出土したのみである。

**小結** 10トレンチも8トレンチ、9トレンチと同様、6トレンチ付近にある微高地の北側に位置する谷地形の内部にあたると思われる。ただし10トレンチの北側には西へ延びる尾根が迫っており、この尾根が大阪層群ないしは段丘層によって形成されているとすれば、谷の北斜面に近い位置であることが推測される。一方、この尾根が沖積錐や崖錐といった地形に相当するものであれば、谷地形は深く埋没している可能性もあろう。

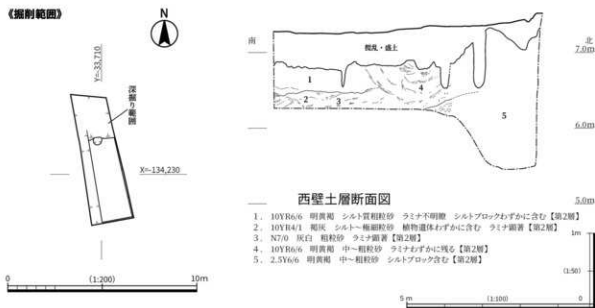


図35 10トレンチ 平面図 土層断面図

## 第5章 総括

前章までに今回の発掘調査における成果を報告してきた。本章ではそれらを総括するとともに、近年の研究成果を踏まえた若干の検討を加えることで、梨木元遺跡を地域史に位置づけることを試みたい。まず、今回の調査であきらかになった点を列記する。

- ◎試掘調査で確認された中世の遺構群の分布範囲は6トレンチの一部に限定されるものであり、その南北には大きな谷地形が埋没していることがあきらかとなった。
- ◎2・12トレンチで古墳時代中期後半（5世紀後半）の小規模方墳の周溝と考えられる溝を検出した。
- ◎6トレンチで鎌倉時代後半（13世紀後半）の集落（居住域）と考えられる遺構群を検出した。
- ◎5・12トレンチを中心に、谷の堆積層から古墳時代の埴輪、奈良時代の土器や瓦などが出土した。
- ◎弥生時代以降、現代に至る谷の埋積過程、現景観の形成過程があきらかとなった。

以下、いくつかの項目について、若干の検討を加えたい。

**2・12トレンチ検出の古墳について** 2トレンチでは弥生時代以降に堆積した厚い堆積層の上で、断片的ながら遺構（5～7溝）を確認し、土器のまとまった出土をみた。また、一連のものと考えられる溝のコーナー部分を12トレンチで検出した（3溝）。断定するにたる材料はないが、これらを一辺11m程度の方墳の周溝痕跡ではないかと考えた。5世紀後半頃の古墳としてみた場合、初期群集墳を構成する小規模な方墳との類似を指摘することができる。大阪府域における初期群集墳は5世紀前半から形成を始めるものもあり、比較的近接地で確認されている寝屋川市太秦古墳群でも、形成期間は5世紀中葉から6世紀前半であって（市本編2006）、形成期間は一樣ではない。しかし、5世紀後半段階にはあらたな群の出現や、埴輪による階層表示の再設定、古墳での需要増に応じた須恵器生産の拡大等が進行した可能性が高く（森本2023）、初期群集墳形成のひとつの画期とみることができる。今回は1基のみの確認であり、群集墳とするには躊躇するところもあるが、ひとまず5世紀後半段階の画期に応じた出現した初期群集墳に相当する古墳としておきたい。

出土した須恵器をみると、まとまって出土した有蓋高坏5個体（図10-1～5）はほぼ同形・同大のものであり、脚部の透かしが円形であるという特徴も共通する。初期群集墳出土土器についての研究成果（北山2018・寺前2018・古屋2011・山田2014）によると、比較的多様な器種、器形が用いられることが多い中において、今回の例は器種・器形に偏りがあることは明白で、本来セットである有蓋高坏の蓋がみられない点も注意される。これが当初の組成を反映しておれば特徴的といえるが、古墳の削平等後発的な要因による可能性も高い。また、一連の須恵器は胎土や製作技術の精度からみて泉北丘陵に所在した陶邑地域で生産されたものと考えられるが、近年の研究では陶邑内での地域差も指摘されている（菱田1992、菅原2006）。これによると陶邑の西地域（梅、大野池、光明池地区）では円形透かしの割合が高く、5世紀後半でもロクロを左回転で用いる割合が高いという特徴が指摘されており、今回出土した有蓋高坏が陶邑西地域から供給された可能性が想定される。

梨木元遺跡周辺は早くに市街地化したこともあり、本来の古墳分布には不明な部分が多い。その中で、調査地の東に広がる枚方丘陵上で、公園として残されてきた部分で2基の古墳が調査されている（中振丸山1号墳・2号墳；大竹ほか2000）。墳丘長16m程度の小型前方後円墳（5世紀後半）と直径18m程度の円墳（6世紀中葉）の2基で、いずれも大きく削平を受けながら、周溝から形象埴輪を含む豊富



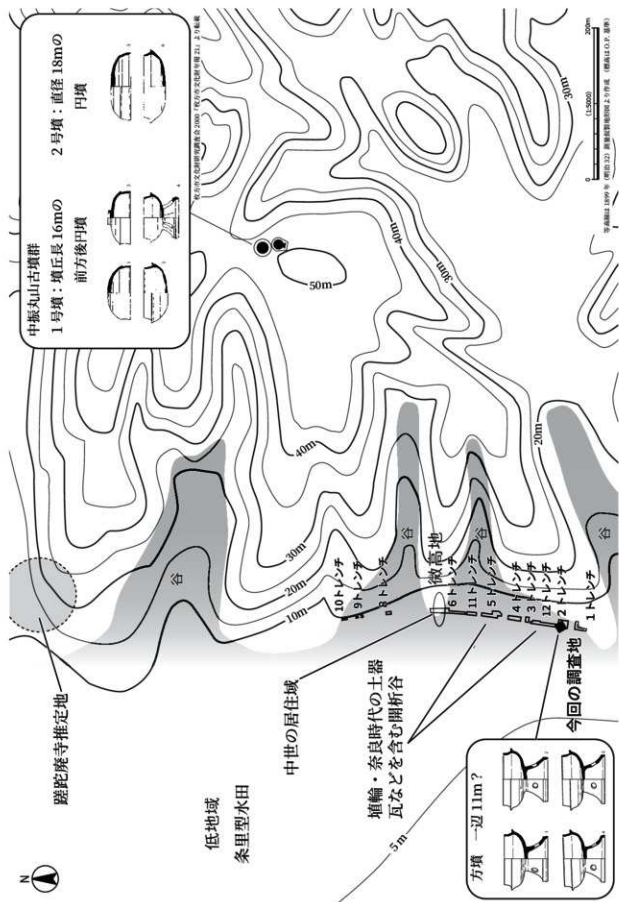


図36 周辺の遺跡との関係

な埴輪や須恵器が出土しており、現時点ではこの2基の古墳が地理的にも時期的にも最も近接する古墳といえる。2トレンチとは直線距離で600m離れた丘陵上にあり、一連の古墳群とみることは難しいかもしれないが、比較的豊富な埴輪や須恵器を伴う中振丸山古墳群が階層的に上位に位置づけられる可能性は高く、同時期に立地を違えて営まれた階層差をもつ古墳の在り方を示している可能性は高い。なお、5・12トレンチを中心に円筒埴輪の細片が出土しており、それらの中には丘陵上に存在した古墳から流入したものが含まれる可能性は先に指摘したところである。埴輪の時期にもやや幅があるようで、中振丸山1号墳・2号墳に限らず、その周囲に未知の古墳が存在した可能性もある。

2トレンチの方墳の被葬者についてはもとより断定できるものではないが、初期群集墳とみるならば、周辺の古墳時代集落で主たる生業に従事する生産者階層の古墳とみることが適当であろう。調査地の西に広がる低地域では、不明な部分が多いものの、楠遺跡や郡六ノ坪遺跡など、渡来人が多く居住する集落の存在が指摘されている(濱田2001、2008)。これらを古墳被葬者の活動領域と想定すると、断片的ではあるものの今回の調査における初期須恵器や韓式系土器の出土とは調和的である。北河内地域では5世紀前半から中葉段階の地域首長墓がみられない地域とされ、王権の直轄的なイメージで語られることが多い。また5世紀後半になって寝屋川市太秦高塚古墳や枚方市姫塚古墳のような中規模古墳が首長墓として新たに古墳群を形成するとされる(西田2010、濱田2010)。しかし、王権や地域首長層と初期群集墳との関係については、相互の関係性など不明瞭な部分も多く(森本2016)、その出現背景については今後も検討が求められる課題である。

**6トレンチ中世集落について** 6トレンチで確認した集落については、調査範囲が狭く、建物配置も復元できない現状で、集落の内容を積極的に検討することは難しいところである。存続期間が比較的短く、規模も小さな居住域と想定されることから、周辺地域における前後の時期を含んだ集落の消長との検討が必要となると考えられる。とりわけ、調査地の西南に広がる茨田郡条里遺跡内における集落の消長が考察材料として期待されるが、これも現時点では資料不足と言わざるを得ない。おそらく北河内地域における条里型地割の開発は奈良時代以降と想定され、現代にまでその地割を良好に残していることを考えると、近世以降の集落景観の出現までには条里型地割の中での段階的な集落の展開が予想される場所である。やや離れた地域での検討にはなるが、西摂猪名川東岸地域における条里型地割内での集落の展開過程を参考にすると(森本2009)、奈良時代以来の小規模な集落域が鎌倉時代にはややまとまった居住域に再構成され、それが13世紀以降におそらく近世以降にも継続する集村的な村落景観を形成したことが指摘できる。また、条里型地割が施行されない高槻市梶原南遺跡でも、13世紀中葉には中世集落廃絶の画期を指摘することができる(森本2022)。これらや先行研究(金田1993)などを参照するならば、梨木元遺跡に営まれた居住域も、条里型地割の中での比較的大型の集落から集村景観への変化の過渡期に位置づけられ、13世紀後半という時期にも齟齬はない。結果的にこの地域における前近代の集落は、調査地南の「郡」集落や、北の「中振」集落などに収斂されていくものと考えられるが、その集落再編の動きの中で一時的にこの地に居住域が形成されたものと考えておきたい。

**谷部の出土遺物と周辺の土地利用について** 5トレンチを中心とした谷部の堆積層からは、遺構が確認された古墳時代中期後半や鎌倉時代後半とは異なる時期の遺物も出土している。古墳時代の円筒埴輪については丘陵上の古墳と関連する可能性を指摘したところである。ほかに目立つのは奈良時代頃の土器と瓦片で、いずれも今回の調査ではその時期の遺構はみられない。谷出土の遺物であることからやや離れた範囲を含む周辺地の遺跡分布をみると、10トレンチの北、400m離れた地点に枚方市九頭神鹿

寺の同範瓦を出す臨陀廃寺が位置している（竹原 2017）。瓦生産地とみる意見もあり寺院や周辺施設の実態は不明ではあるが、古代寺院の造営ないしは経営に関わる活動が梨木元遺跡周辺で行われていた可能性は高い。なお、土器や瓦、埴輪の遺存状況を比較すると、瓦と埴輪は一個体のごく一部のみが出土するのに対し、12 トレンチで出土した奈良時代土器は相対的に残存状況の良いものを含んでいる。断定できるものではないが、奈良時代に土器を用いていた場所は古墳や寺院よりも調査地に近かったことが推測できる。あえて寺院とは異なる奈良時代集落の存在を想定するならば、河内国茨田郡の都御推定地の一つである「郡村御所山」が調査地東方の丘陵上にある（寝屋川市役所 1966）ことにも留意しておく必要がある。ただし奈良時代の公的施設の存在を示唆する遺物（墨書土器や硯、帯金具、祭祀具など）は全く出土していないため、あくまで可能性の提示にとどめたい。

**茨田郡条里遺跡としての梨木元遺跡** 今回の調査においては梨木元遺跡を事前の試掘調査において新規に確認された遺跡として取り扱ってきたが、新規に埋蔵文化財包蔵地として登録された範囲の南端は既存の茨田郡条里遺跡と重複している（図 2）。茨田郡条里遺跡は近現代の土地区画に痕跡を残す条里型地割を基準に設けられた遺跡であって、その範囲内には郡六ノ坪遺跡や桶遺跡といった遺跡が重複しており、これまでに発掘調査も行われている。しかし、条里に関連する遺構、特に条里境や坪境は現行の道路や水路となっている場合がほとんどで、発掘調査事例が報告されたことはない。今回の梨木元遺跡の調査範囲を『寝屋川市誌』（寝屋川市役所 1966）に記述のある条里坪付け復元に従ってみると、茨田郡条里の五条、六条の東縁にあたり、1・2・12 トレンチが六条に属する郡一の坪、3 トレンチ以北が中振の坪（坪付不明）に属するものとなり、3 トレンチと 4 トレンチの間、6 トレンチの北寄りに東西方向の坪境が通る事になる。復元される条里地割は今回の調査地よりわずかに東に及び、丘陵地域にまでかかるもので、実際にどのような土地区画が行われたものかは不明と言わざるを得ないが、今回の調査においても直接に条里に関連する遺構はみられなかった。唯一、12 トレンチで中世以降の土層で確認した東西方向の溝（1 溝：図 13 断面図）は、東西方向の幅 6.5 m、深さ 0.8 m の大型の溝で、調査範囲の西に延びる府道 148 号（木屋交野線）の延長線上にあたることから、中世以降の条里型地割に関連する溝の可能性が高い。ただし府道木屋交野線は厳密には条里復元線よりやや南に振っている。

**埋没微地形と現景観の形成過程** 事実報告の中でも再三触れてきたように、調査範囲の中央、6 トレンチ付近に東から延びる丘陵尾根端部の微高地があり、今回の調査で確認した中世の居住域はこの微高地上に営まれている。一方、基盤層の深度からみると、その南北は大きな谷地形となっていた可能性が高い。これらの谷地形は弥生時代から中世にかけて埋積が進んだようで、南側の谷南部は砂が厚く堆積することにより尾根状の微高地へと変化し、2 トレンチではその上に古墳時代中期後半（5 世紀後半）の溝（古墳）が営まれている。また、中央の微高地上に営まれた居住域の廃絶と想定される鎌倉時代後半（13 世紀後半）には谷部分でも溝の掘削などの働きかけが行われたものと考えられる（5 トレンチ、11 トレンチ）。その後、さらに埋積が進んだ結果、南北が高く、中央付近がやや低い現在の地形が形成され、一帯が耕作地となる景観が出現したものと考えられる。

以上、周辺地域における調査・研究成果をふまえつつ、簡単な検討を行った。梨木元遺跡を含む香里地域ではこれまで埋蔵文化財の調査事例に乏しく、今後の調査・研究に期する部分も多く残されている。今回の調査成果がその先駆けとして、周辺地域の歴史をより豊かにするために評価・活用されることを祈念しつつ、まとめとしたい。

## 引用・参考文献

- 市本芳三編 2006『太秦遺跡・太秦古墳群Ⅱ』（財）大阪府文化財センター調査報告書第143集
- 大竹弘之・西村健司 2000『10. 香里園山之手遺跡（第4次調査）』『枚方市文化財年報』21（財）枚方市文化財調査研究会
- 河本純一 2022『伊加賀遺跡・伊加賀古墳群』（公財）大阪府文化財センター調査報告書第318集
- 北山峰生 2018『近畿一木棺直葬墓の須惠器一』『季刊考古学』第142号 雄山閣
- 金田章裕 1993『微地形と中世村落』中世史研究選書 吉川弘文館
- 小林千夏 2011『北河内における須惠器高杯の一種相』『大阪文化財研究』第39号（公財）大阪府文化財センター
- 菅原雄一 2006『陶器窯跡群の地域差と技術拡散』『考古学研究』第53巻1号 考古学研究会
- 瀬川芳則・塩山則之 1998『第2章考古 第4節古墳時代』『寝屋川市』第1巻 寝屋川市
- 竹原伸仁 1997『北河内地域における古代寺院の諸様相—飛鳥時代後期創建寺院をめぐって—』『聖田 直先生古希記念論文集』真陽社
- 竹原伸仁 2017『4. 踰陀庵寺』『枚方市文化財年報』38（公財）枚方市文化財調査研究会
- 田辺昭三 1981『須惠器大成』角川書店
- 寺前直人 2018『須惠器の儀礼—土師器との比較をとおして—』『季刊考古学』第142号 雄山閣
- 西田敏秀 2009『北河内における前・中期首長墓の動向と王権』『北河内の古墳 前・中期古墳を中心に』（財）交野市文化財事業団
- 寝屋川市役所 1966『寝屋川市誌』
- 服部昌之 1990『第二章 八世紀の大阪 第三節 条里と交通路』『大阪府史』第2巻 大阪府
- 埴輪検討会編 2022『埴輪の分類と編年』埴輪検討会
- 濱田延充 2001『埴輪跡Ⅱ』寝屋川市文化財資料25 寝屋川市教育委員会
- 濱田延充 2008『郡六ノ坪遺跡出土の韓式系土器』『韓式系土器研究Ⅹ』韓式系土器研究会
- 濱田延充 2009『淀川左岸低地の古墳と古代豪族の動向』『北河内の古墳 前・中期古墳を中心に』（財）交野市文化財事業団
- 菱田哲郎 1992『須惠器生産の拡散と工人の動向』『考古学研究』第39巻3号 考古学研究会
- 広瀬和雄 1989『畿内の古代集落』『研究報告』第22集 国立歴史民俗博物館
- 古屋紀之 2011『土器と土製品の古墳祭祀』『古墳時代の考古学3 墳墓構造と葬送祭祀』同成社
- 別所秀高 2022『自然地理編』『新修摂津市史』第1巻 摂津市
- 前田 昇 1998『第1章 自然地理』『寝屋川市』第1巻 寝屋川市
- 丸山香代 2018『国史跡高宮廃寺跡発掘調査報告書』寝屋川市文化財資料30 寝屋川市教育委員会
- 道上祥武 2017『古代西日本の集落遺跡』『ヒストリア』第265号 大阪歴史学会
- 南 孝雄 2011『北河内の初期須惠器生産』『ヤマト王権の政治基盤を掘る！ 講演記録集』交野市教育委員会
- 森本 徹 2009『考古学からみた猪名川東岸地域における開発の諸段階』『地域研究いたみ』第38号 伊丹市立博物館
- 森本 徹 2010『讃良郡条里遺跡の古墳時代中～後期の集落』『歴史シンポジウム資料 緑立つ道の遺跡たち 第二京阪道路関連遺跡の調査を総括する』寝屋川市教育委員会
- 森本 徹 2016『地域首長墓と初期群集墳』『館報』19 大阪府立近つ飛鳥博物館
- 森本 徹 2022『梶原南遺跡』（公財）大阪府文化財センター調査報告書第315集
- 森本 徹 2022『梶原古墳群2』（公財）大阪府文化財センター調査報告書第323集
- 森本 徹 2023『高槻市梶原古墳群の調査が提起する問題』『館報』26 大阪府立近つ飛鳥博物館
- 森本 徹・廣瀬時習・島崎久恵・市村慎太郎 2007『摂河泉古墳時代集落の基礎研究』『研究調査報告』第5集 財団法人大阪府文化財センター
- 安村俊史 2010『河内における古代集落の変遷』『日本古代の王権と社会』塙書房
- 山田俊輔 2014『須惠器を中心とする土器祭祀の系譜』『古代』第133号 早稲田大学考古学会
- 吉田知史 2012『大阪府内の様相』『集落からみた7世紀』第61回埋蔵文化財研究集會資料 埋蔵文化財研究会

表1 遺構一覧表

トレンチ	遺構名	規模 (m)	時期	遺物	備考	トレンチ	遺構名	規模 (m)	時期	遺物	備考
2	1-3土器	—	古墳	○	5-6溝の中	6	15ビット	径 0.52 深 0.70	中世	○	木製品有
2	4-8土	—	古墳	○	6溝の一部	6	16ビット	長 0.62 幅 0.48 深 0.16	中世	○	礎含む
2	5溝	長 2.7+ 幅 0.85 深 0.07	古墳	○	方墳周溝か	6	17 落込	—	—	○	
2	6溝	長 1.85+ 幅 0.95 深 0.08	古墳	○	方墳周溝か 赤色粒含む	6	18ビット	長 0.36 幅 0.34 深 0.28	中世	○	
2	7溝	長 2.15+ 幅 0.75 深 0.18	古墳	○	方墳周溝か	6	19ビット	長 0.30 幅 0.26	中世	○	
12	1溝	長 3.0+ 幅 6.4 深 0.8	中世以降	○		6	20ビット	長 0.42 幅 0.28 深 0.10	中世	○	礎含む
12	2ビット	径 0.25 深 0.13	古代以降	○		6	21ビット	長 0.34 幅 0.30 深 0.36	中世	○	礎含む
12	3溝	長 1.6+ 幅 1.3 深 0.5	古墳	○	方墳周溝か	6	22ビット	長 0.32 幅 0.28 深 0.20	中世	○	
12	4土坑	長 2.5+ 幅 0.7+ 深 0.18	—	○		6	23ビット	長 0.34 幅 0.30 深 0.26	中世	○	礎含む
12	5落込	長 5.8+ 幅 1.2+ 深 0.1	古代以降	○		6	24ビット	長 0.24 幅 0.14+ 深 0.26	中世	○	礎含む
12	6溝	長 2.2+ 幅 1.5 深 0.7	古代以降	○		6	25ビット	長 0.28 幅 0.26 深 0.14	中世	○	礎含む
12	7机	径 0.32 深 1.19	—	○		6	26ビット	長 0.44 幅 0.28 深 0.32	中世	○	木片 (机先) 有
4	1落込	長 3.2+ 幅 2.65+ 深 0.17	中世以降	○		6	27 落込	幅 0.56+ 深 0.10	中世	○	
4	2落込	長 3.9+ 幅 2.8+ 深 0.33	中世	○		6	28 落込	長 1.20 幅 0.58 深 0.05	中世	○	
4	3溝	長 4.0 幅 3.0+ 深 0.22	中世	○		6	29ビット	径 0.16 深 0.14	中世	○	
4	4ビット	径 0.23 深 0.15	中世	○		6	30ビット	長 0.42 幅 0.30 深 0.30	中世	○	
4	5ビット	長 0.4 幅 0.3 深 0.37+	中世	○	柱状有 礎含む 木片 (板)	6	31ビット	長 0.34 幅 0.32 深 0.24	中世	○	礎含む
4	6ビット	長 0.20 幅 0.15 深 0.08	中世	○		6	32ビット	長 0.38 幅 0.24 深 0.12	中世	○	
4	7ビット	長 0.45 幅 0.35 深 0.43	中世	○		6	33 落込	長 1.30 幅 0.88+ 深 0.02	中世	○	
4	8ビット	径 0.28 深 0.20	中世	○		6	34 落込 (溝)	— 溝部分は幅 0.3 深 0.1	中世	○	
4	9ビット	径 0.53 深 0.35	中世	○		6	35ビット	径 0.14 深 0.03	中世	○	
4	10ビット	径 0.35 深 0.15	中世	○		6	36ビット	長 0.44 幅 0.36+ 深 0.33	中世	○	
4	11ビット	長 0.45 幅 0.40 深 0.40	中世	○	礎含む	6	37ビット	長 0.42 幅 0.34 深 0.11	中世	○	
4	12ビット	径 0.38 深 0.28	中世	○	礎含む	6	38ビット	長 0.62 幅 0.50 深 0.04	中世	○	
4	13ビット	長 0.50 幅 0.30 深 0.3	中世	○		6	39ビット	長 0.50 幅 0.28 深 0.05	中世	○	
4	14土器	—	古墳	○		6	40ビット	長 0.16 幅 0.14 深 0.03	中世	○	
5	1溝	長 3.0+ 幅 1.5 深 0.5	中世	○	遺物量多い 瓦器類・土 師器類埋藏	6	41ビット	長 0.34 幅 0.32 深 0.46	中世	○	
5	2道路	長 7.0+ 幅 4.0+ 深 0.5	中世以降	○	遺物量多い	6	42ビット	長 0.40 幅 0.30 深 0.32	中世	○	木片有
11	1溝	長 2.5+ 幅 1.6 深 0.5	中世以降	○		6	43ビット	長 0.36 幅 0.26 深 0.32	中世	○	礎含む
6	1溝	長 0.34+ 幅 1.05 深 0.35	中世以降	○		6	44ビット	長 0.22 幅 0.22 深 0.03	中世	○	
6	2溝	長 0.34 幅 1.65 深 0.4	中世以降	○		6	45ビット	長 0.50 幅 0.30 深 0.20	中世	○	
6	3溝	幅 0.54 深 0.12	中世	○		6	46ビット	長 0.34 幅 0.3 深 0.18	中世	○	
6	4溝	幅 0.22 深 0.06	中世	○		6	47ビット	長 0.22 幅 0.20 深 0.06	中世	○	
6	5溝	幅 0.29 深 0.04	中世	○		6	48ビット	長 0.22 幅 0.16 深 0.08	中世	○	
6	6土坑	長 2.08+ 幅 1.96 深 0.16	中世以降	○		6	49ビット	長 0.22 幅 0.20 深 0.10	中世	○	
6	7土坑	長 0.60 幅 0.55 深 0.13	中世	○		6	50ビット	長 0.24 幅 0.22 深 0.10	中世	○	
6	8ビット	長 0.34 幅 0.20	中世	○		6	51ビット	長 0.20 幅 0.18 深 0.8	中世	○	
6	9ビット	径 0.18 深 0.07	中世	○		6	52 落込	長 0.68 幅 0.44	中世	○	
6	10ビット	長 0.32 幅 0.28 深 0.08	中世	○		6	53ビット	長 0.32 幅 0.24 深 0.28	中世	○	
6	11ビット	長 0.50 幅 0.42 深 0.12	中世	○	礎含む	6	54ビット	長 0.28 幅 0.26	中世	○	
6	12ビット	長 0.45 幅 0.30 深 0.15	中世	○		6	55ビット	長 0.38 幅 0.30 深 0.10	中世	○	
6	13溝	幅 0.26+ 深 0.15	中世	○		6	56ビット	長 0.34 幅 0.28 深 0.05	中世	○	
6	14ビット	径 0.40	中世	○	ごく浅い	6	57ビット	長 0.28 幅 0.28	中世	○	
						6	58ビット	長 0.26 幅 0.22 深 0.10	中世	○	
						6	59ビット	長 0.28 幅 0.28	中世	○	
						6	60ビット	長 0.30 幅 0.22	中世	○	

表2 遺物一覧表(1)

遺物 番号	図版 番号	器 種	器 形	時 期	法量(cm)		特記事項	登録番号	遺構面・ 層名	トレ ンチ	
					口径 (復原径)	器高 (残存高)					
1	10	21	須恵器	有蓋高环	5c後	10.5	9.2		22-1/003	1土層	2
2	10	21	須恵器	有蓋高环	5c後	(10.9)	9.5		22-1/004	2土層	2
3	10	21	須恵器	有蓋高环	5c後	11.0	9.3		22-1/005	3土層1	2
4	10	21	須恵器	有蓋高环	5c後	10.7	8.9		22-1/006	3土層2	2
5	10	21	須恵器	有蓋高环	5c後	10.5	9.2		22-1/007	3土層3	2
6	10	—	須恵器	有蓋高环 (片部)	5c後	(9.8)	(4.4)		22-1/004	2土層	2
7	10	—	須恵器	高环 (脚部)	5c後	脚径(9.1)	(3.8)		22-1/004	2土層	2
8	10	24	須恵器	無蓋高环	5c後	—	(5.2)		22-1/009	6溝	2
9	10	24	脚式系 土器	甕か (体部片)	5c後	長(4.0)	幅(3.2)	外面烏足文タタキ	22-1/001	第3a層	2
10	15	24	陶器	甕	近世	(48.1)	(7.7)		23-1/006	1溝	12
11	15	24	土師器	皿	14c初	(7.6)	1.2		23-1/010	3溝	12
12	15	24	土師器	皿	14c初	(8.3)	1.1		23-1/010	3溝	12
13	15	24	土師器	皿	13c後	(9.6)	2.2		23-1/010	3溝	12
14	15	24	瓦器	椀	13c後	(11.6)	(3.7)		23-1/010	3溝	12
15	15	25	須恵器	蓋	奈良	(16.0)	(2.3)		23-1/011	5落込	12
16	15	25	須恵器	皿	奈良	(14.0)	2.7		23-1/011	5落込	12
17	15	24	土師器	台付皿 (高台)	中世	—	(2.9)		23-1/012	第2層	12
18	15	24	瓦質土器	羽釜(足)	中世	長(9.2)	厚(2.2)		23-1/013	第2層	12
19	15	24	瓦質土器	羽釜(足)	中世	長(12.3)	厚(2.3)		23-1/014	第2層	12
20	15	23	須恵器	平瓶	奈良	体径(15.6)	(9.2)		23-1/007 + 008 + 010	3溝もしくは 第2層	12
21	15	26	須恵器	平瓶	奈良	体径(21.6)	(7.6)		23-1/018	3溝もしくは 第2層	12
22	15	25	須恵器	蓋	奈良	(18.8)	(2.0)		23-1/014	第2層	12
23	15	25	須恵器	环	奈良	(14.5)	4.2		23-1/009	第2層	12
24	15	25	須恵器	环	奈良	台径(10.8)	(1.0)		23-1/009	第2層	12
25	15	23	須恵器	环	奈良	(13.7)	3.8		23-1/008 + 009	第2層	12
26	15	23	須恵器	甕	奈良	—	(8.3)		23-1/009	第2層	12
27	15	25	須恵器	甕 (高台)	奈良	台径(14.4)	(3.4)		23-1/016	第2層	12
28	15	26	土師器	鉢	奈良	(25.8)	(9.6)		23-1/009	第2層	12
29	15	23	土師器	皿	奈良	(28.8)	3.8		23-1/007-009	第2層	12
30	15	23	土師器	甕	奈良	29.2	(19.0)		23-1/014	第2層	12
31	15	23	須恵器	环	古墳	11.6	5.8	体部に波状文	23-1/014	第2層	12
32	15	25	須恵器	無蓋高环	古墳	(15.8)	(4.1)		23-1/013	第2層	12
33	15	23	土師器	高环	古墳	—	(5.8)		23-1/005	第2層～ 第3a層	12
34	15	23	土師器	高环	古墳	—	(5.1)		23-1/013	第2層	12
35	15	29	土師器	高环	古墳	—	(6.3)		23-1/014	第2層	12
36	15	23	土師器 4.1(は 券生土器)	不明	不明	底径(16.0)	(5.3)		23-1/009	第2層	12
37	15	30	円筒埴輪	円筒埴輪	古墳	長(5.8)	幅(4.8)	厚(1.8)	23-1/013	第2層	12
38	15	30	円筒埴輪	円筒埴輪	古墳	長(3.4)	幅(7.6)	厚(1.5)	23-1/014	第2層	12
39	15	25	砥石	不明	長(5.6)	幅(3.9)	砂岩質		23-1/015	第2層	12
40	18	26	土師器	皿	13c	(9.4)	(1.7)		22-1/016	第3a層	3
41	18	26	土師器 4.1(は 黑色土器)	椀	古代	(15.9)	(2.9)	外面ヘラケズリ	22-1/014	第3層	3
42	18	26	黑色土器	椀 (高台)	古代	底径6.1	(1.3)		22-1/016	第3a層	3
43	18	26	黑色土器	椀 (高台)	古代	底径(7.0)	(2.4)		22-1/016	第3a層	3
44	18	26	須恵器	环	5c前	(10.0)	5.1	土釜形	22-1/016	第3a層	3
45	18	26	平瓦	平瓦	古代か	長(10.9)	幅(6.0)	凹面:布目瓦痕 凸面:縄目タタキ	22-1/015	第3a層～ 第3b層	3
46	18	26	黑色土器	皿	古代	(14.8)	3.1		22-1/018	第3b層	3
47	18	22	須恵器	蓋	奈良	—	(2.1)		22-1/018	第3b層	3
48	18	26	須恵器	环か (高台)	奈良	底径(10.6)	(3.7)		22-1/018	第3b層	3
49	18	26	土師器	皿	古代	(14.0)	(2.2)		22-1/018	第3b層	3
50	18	26	須恵器	环	5c	(10.3)	(5.3)		22-1/018	第3b層	3
51	18	26	須恵器	(把手付)椀	5c	(14.0)	(4.1)		22-1/018	第3b層	3
52	18	26	脚式系 土器	甕か (体部片)	5c	長(3.7)	幅(5.3)	外面平瓦タタキ+螺旋状洗線か	22-1/018	第3b層	3
53	18	26	平瓦	平瓦	古代か	長(7.6)	幅(7.9)	凹面:布目瓦痕 凸面:縄目タタキ	22-1/018	第3b層	3
54	21	27	須恵器	器台	古墳	長(5.9)	幅(5.7)		22-1/019	盛土～第2層	4
55	21	27	瓦器	椀 (高台)	13c前	底径(6.2)	(0.9)		22-1/019	盛土～第2層	4



表2 遺物一覧表(3)

遺物番号	補記番号	図号	器種	器形	時期	法量(cm)		特記事項	登録番号	遺構面・層名	トレンチ
						口径(復原径)	器高(残存高)				
116	32	30	円筒埴輪	円筒埴輪	古墳	長(9.7)	幅(8.3)	一次調整:タテハケ	試/63	第3a層	6
117	32	—	木製品	不明	中世	(20.9)	1.8	転用材	22-1/009	15ビット	6
118	—	24	土師器	甕?	古墳	長(4.6)	幅(6.0)	弥生土器の可能性もあり	22-1/041	第3a層	1
119	—	24	土師器	甕?(体部)	古墳	長(10.0)	幅(13.0)	※法量は最大の破片	22-1/011+012	第3b層	2
120	—	24	土師器	高坏?	古墳	長(8.5)	幅(7.5)		22-1/011	第3b層	2
121	—	24	陶器	甕	中世	長(6.7)	幅(6.8)		23-1/015	第2層	12
122	—	25	白磁	甕	中世	長(2.6)	幅(3.1)		23-1/013	第2層	12
123	—	25	青磁	甕	中世	長(2.4)	幅(2.5)		23-1/014	第2層	12
124	—	25	陶器(瀬戸)	不明	中世	長(1.4)	幅(2.0)		23-1/007	第2層~第3a層	12
125	—	25	青磁	甕	中世	長(2.4)	幅(3.7)	外面に鎌弁	23-1/003	第1層~第2層	12
126	—	25	石製品	石綱	中世	長(6.5)	幅(5.0)	外面に塚付着	23-1/009	第2層	12
127	—	25	須恵器	器台か	古墳	長(2.9)	幅(5.3)	外面に組紐文か 初明須恵器	23-1/004	第2層~第3a層	12
128	—	25	須恵器	器台か	古墳	長(3.8)	幅(3.2)	外面タタキのち列点文 初明須恵器	23-1/007	第2層~第3a層	12
129	—	25	須恵器	甕	古墳	長(5.0)	幅(8.0)	波状文	23-1/005	第2層~第3a層	12
130	—	26	平瓦	平瓦	古代	長(5.4)	幅(4.8)	凸面:綱目タタキ	23-1/007	第2層~第3a層	12
131	—	29	土師器	高坏	古墳	長(6.7)	幅(6.1)		23-1/016	第2層	12
132	—	29	土師器	高坏	古墳	長(5.6)	幅(4.9)		23-1/009	第2層	12
133	—	29	土師器	高坏	古墳か	長(5.1)	幅(3.9)	脚内面に巻き上げ痕顯著	23-1/001	第1層~第2層	12
134	—	29	土師器	高坏	古墳か	長(4.4)	幅(3.6)	脚内面に巻き上げ痕顯著	23-1/014	第2層	12
135	—	29	土師器	高坏	古墳か	長(5.1)	幅(5.2)		23-1/014	第2層	12
136	—	29	土師器	高坏	古墳か	長(4.9)	幅(4.9)	脚内面に巻き上げ痕顯著	23-1/014	第2層	12
137	—	29	土師器	高坏	古墳か	長(5.4)	幅(3.6)	脚内面に巻き上げ痕顯著	23-1/014	第2層	12
138	—	29	土師器	高坏	古墳か	長(2.7)	幅(3.0)		23-1/014	第2層	12
139	—	29	土師器	高坏	古墳か	長(5.9)	幅(3.2)	脚内面に巻き上げ痕顯著	23-1/014	第2層	12
140	—	30	円筒埴輪	円筒埴輪	古墳	長(4.3)	幅(5.2)	密雲焼成	23-1/001	第1層~第2層	12
141	—	30	円筒埴輪	円筒埴輪	古墳	長(6.1)	幅(6.0)	密雲焼成	23-1/014	第2層	12
142	—	30	円筒埴輪	円筒埴輪	古墳	長(5.7)	幅(7.5)	須恵質 一次調整:タテハケ	23-1/014	第2層	12
143	—	30	円筒埴輪	円筒埴輪	古墳	長(6.2)	幅(5.9)	一次調整:タテハケ 密雲焼成	23-1/012	第2層	12
144	—	30	円筒埴輪	円筒埴輪	古墳	長(5.5)	幅(7.2)	須恵質 一次調整:タテハケ 円形透かし	23-1/013	第2層	12
145	—	30	形象埴輪	不明	古墳	長(6.2)	幅(7.7)	密雲焼成	23-1/008	第1層~第2層	12
146	—	29	陶器	甕(体部)	中世	長(9.5)	幅(12.0)	古備前か ※法量は最大の破片	22-1/125+126+142+130+139+123	第3層・2段路	5
147	—	29	陶器	甕(体部)	中世	長(3.0)	幅(7.5)	古備前か	22-1/141	第3層	5
148	—	29	陶器	甕(口縁)	中世	長(7.0)	幅(9.5)	常滑	22-1/126	第3a層~第3b層	5
149	—	29	陶器	甕子	中世	長(6.0)	幅(9.0)	古瀬戸	22-1/130	第3b層	5
150	—	29	平瓦	平瓦	古代か	長(7.0)	幅(5.0)	凹面:布目瓦痕 凸面:綱目タタキ	22-1/144	第4層	5
151	—	29	須恵器	器台	古墳	長(5.7)	幅(7.0)		22-1/129	第3b層	5
152	—	29	瓦質土器	(体部片)	古墳か	長(3.5)	幅(3.0)	外面:格子タタキ 韓式系土器か	22-1/129	第3b層	5
153	—	30	円筒埴輪	円筒埴輪	古墳	長(4.5)	幅(3.0)	調整不明	22-1/143	第4層~第5層	5
154	—	30	円筒埴輪	円筒埴輪	古墳	長(3.0)	幅(3.5)	ハケ(方向不明)	22-1/141	第3層	5
155	—	30	円筒埴輪	円筒埴輪	古墳	長(4.0)	幅(6.0)	タテハケのみ	22-1/127	第3a層	5
156	—	30	円筒埴輪	円筒埴輪	6c	長(3.5)	幅(7.0)	須恵質 タテハケのみ 円形透かし	22-1/130	第3b層	5
157	—	24	陶器	初埴	中世	長(5.0)	幅(5.0)	古瀬戸 底部糸切	22-1/114	第3a層	11
158	—	30	埴輪	(尖帯)	古墳	長(5.0)	幅(5.0)	調整不明	22-1/121	第3a層	11
159	—	28	瓦器	小甕(底部)	中世	径(3.5)	高(1.0)		22-1/058	第3a層	6
160	—	28	黒色土器	甕(高台)	古代	長(5.0)	幅(5.0)		22-1/112	第2層~第3a層	6
161	—	28	黒色土器	甕(高台)	古代	長(5.0)	幅(5.0)		22-1/052	第3a層	6
162	—	28	黒色土器	甕(高台)	古代	長(7.0)	幅(4.0)		22-1/051	第3a層	6
163	—	28	須恵器	甕(底部)	古代	長(4.5)	幅(3.5)	削り出し蛇の目高台 籬か	22-1/054	第3a層	6
164	—	30	円筒埴輪	円筒埴輪	6c	長(8.0)	幅(8.0)	須恵質 外面:タテハケ 内面:ヨコハケ	22-1/051	第3a層	6
165	—	28	石材	結晶片岩片	中世	長(8.0)	幅(10.0)		22-1/051	第3a層	6



# 写 真 图 版



図版1 調査地の景観・層序



調査地の景観 [北から]



土層断面 (6トレンチ西壁) [東から]

図版2 層序



土層断面 左上:1トレンチ西壁【東から】、右上:同南壁【北から】、左下:2トレンチ西壁、右下:3トレンチ西壁【いずれも東から】



土層断面 左上:4トレンチ東壁【西から】、右上:5トレンチ西壁、左下:11トレンチ西壁、右下:6トレンチ西壁【いずれも東から】



第1面 全景 [東から]



第2面 全景 [北から]

図版4 遺構 1トレンチ



第3面 全景 [北から]



噴砂痕跡 [北から]

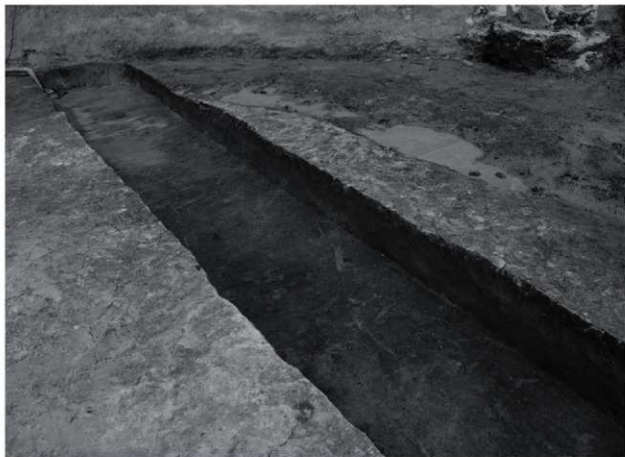


第1面 全景 [南から]



第2面 全景 [南から]

図版6 遺構 2トレンチ



第3面 部分 [北から]



5～7溝 (方墳) [南から]





5溝 遺物出土状況 [西から]



6溝 遺物出土状況 [南から]

図版8 遺構 12トレンチ



第1面 全景【南から】



第2面 全景【南から】



第2面 全景 [北から]



第3面 全景 [北から]

図版 10 遺構 3 トレンチ



第1面 全景 【東から】



第2面 全景 【東から】



第1面 全景 [南から]



第2面 (第3-2a層除去面) 全景 [南から]

図版 12 遺構 4 トレンチ



第3面 全景 【南から】



第3-2a 層中 遺物出土状況 【西から】



第2面 全景 [東から]



1溝 遺物出土状況 [東から]

図版 14 遺構 5 トレンチ



第3面 全景 【東から】



第3面 全景 【北から】



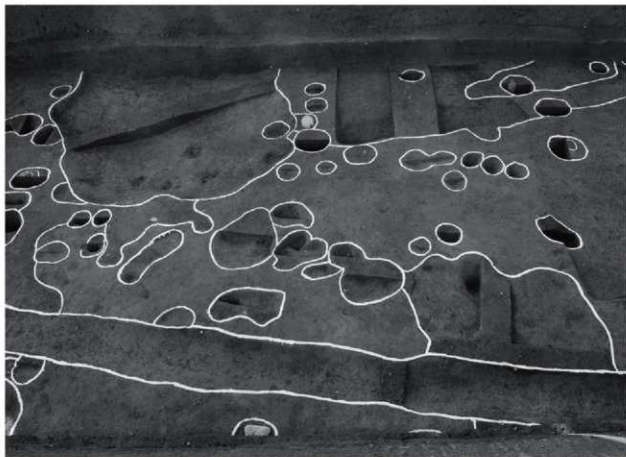


第1面 全景 [北から]

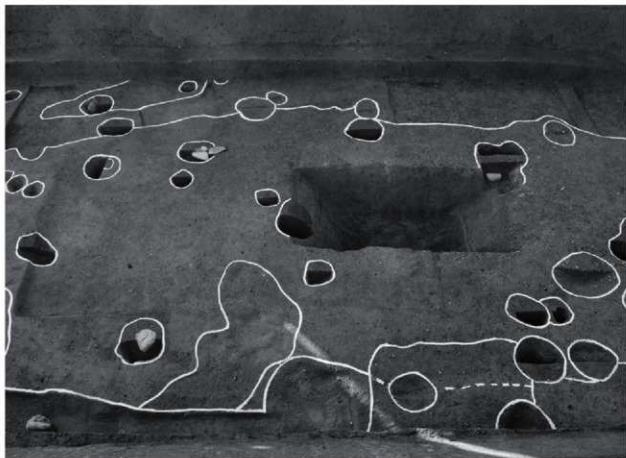


第1面 全景 [南から]

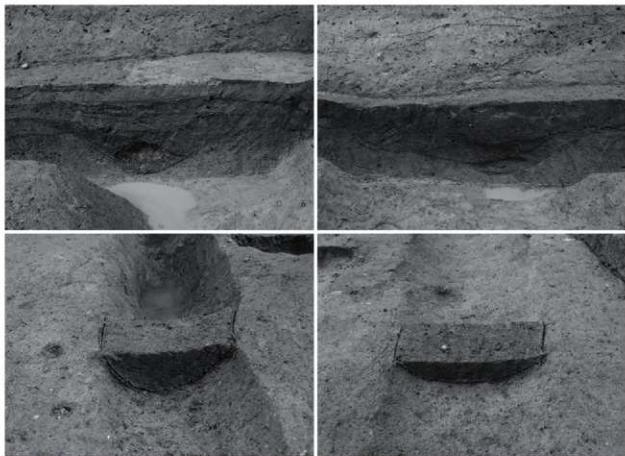
図版 16 遺構 6 トレンチ



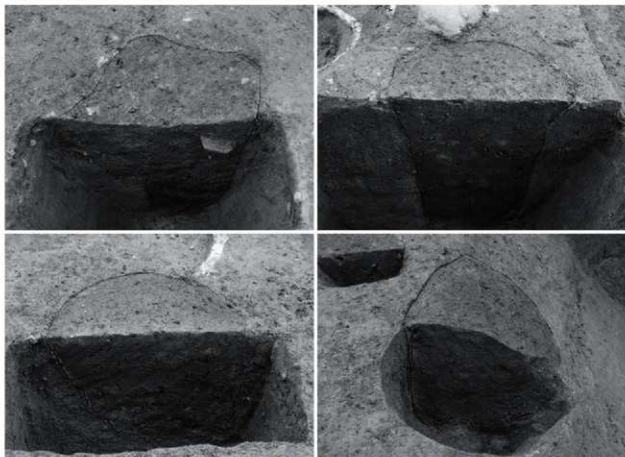
遺構集中部 【東から】



遺構集中部 【東から】

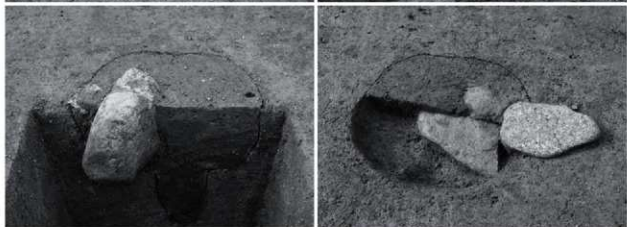
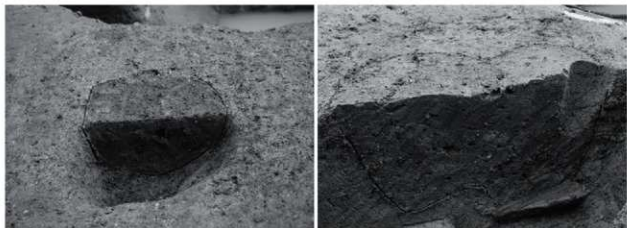


遺構埋土断面 左上：1溝 [東から]、右上：2溝 [東から]、左下：4溝 [西から]、右下：5溝 [南から]

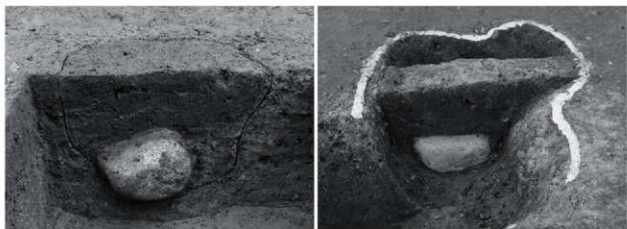


遺構埋土断面 左上：15ピット [東から]、右上：41ピット [東から]、左下：18ピット [東から]、右下：30ピット [東から]

図版 18 遺構 6 トレンチ



遺構埋土断面 左上:50ピット[東から]、右上:26ピット[東から]、左下:21ピット[東から]、右下:20ピット[東から]



遺構埋土断面 左上:31ピット[東から]、右上:16ピット[東から]、左下:23ピット[東から]、右下:25ピット検出状況[南から]

図版 19 遺構 8トレンチ・9トレンチ



8トレンチ 第1面 全景・土層断面 [東から]



9-1トレンチ 全景・土層断面 [東から]

図版 20 遺構 9 トレンチ・10 トレンチ



9-2 トレンチ 全景・土層断面 【北から】



10 トレンチ 土層断面 【東から】



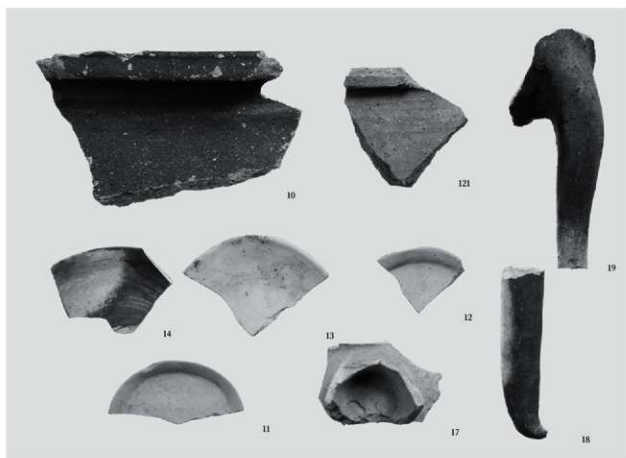
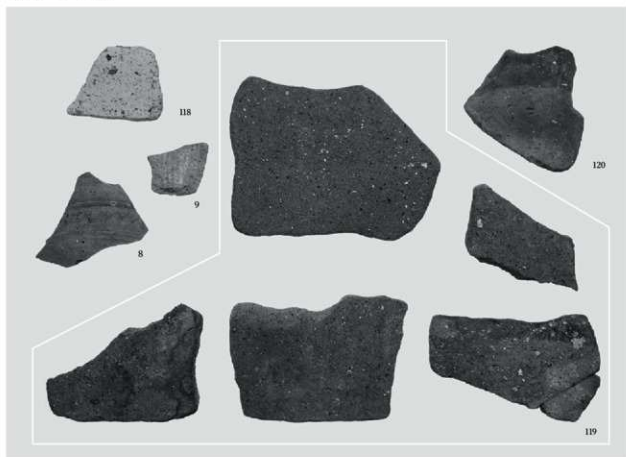
图版 22 遺物

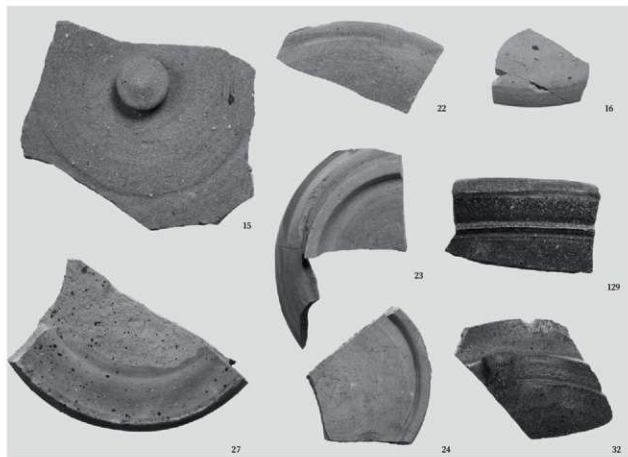
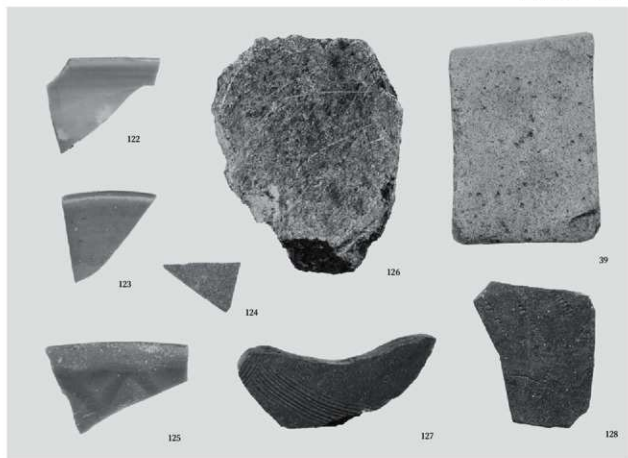


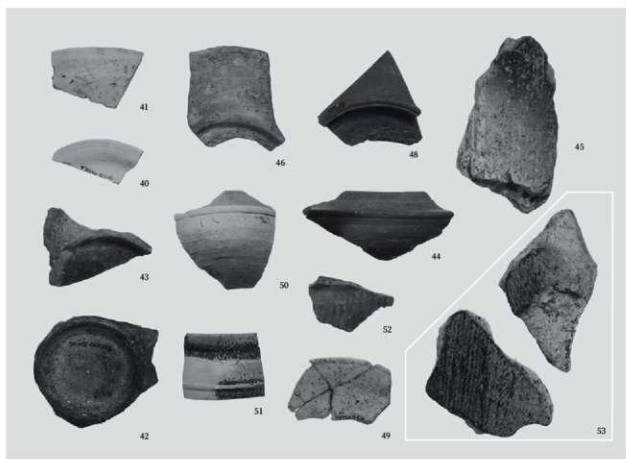
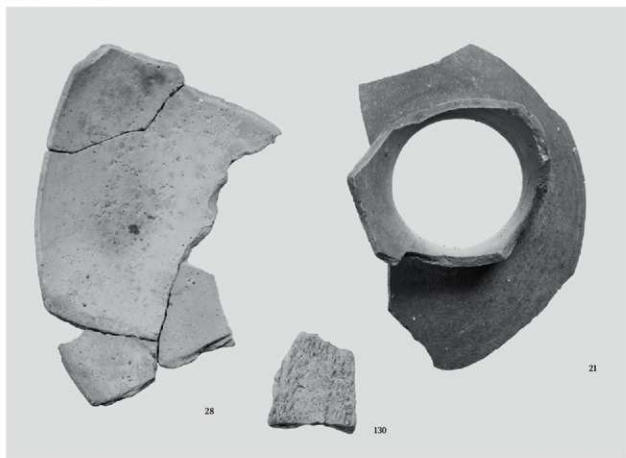


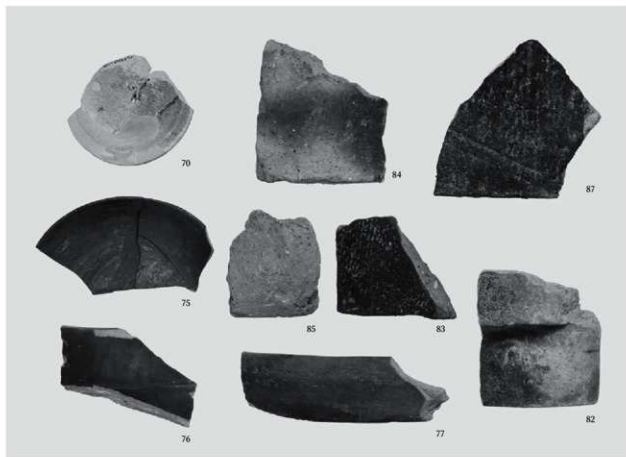
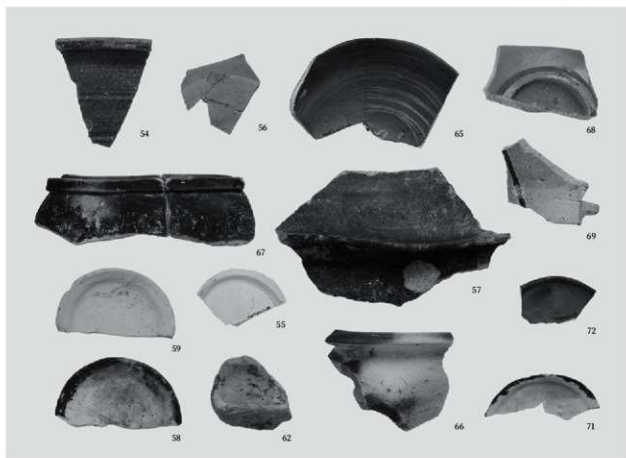


图版 24 遺物

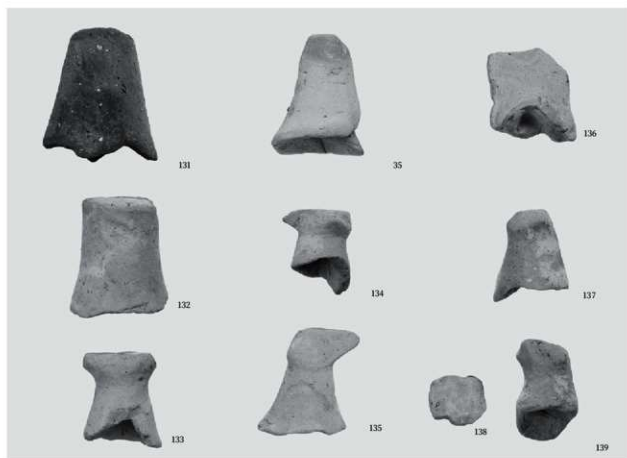
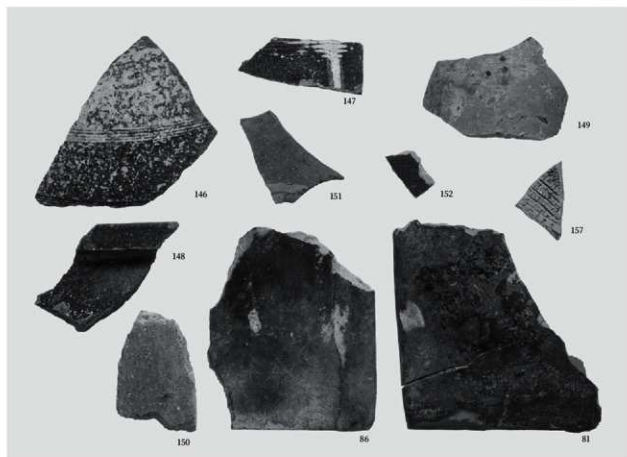




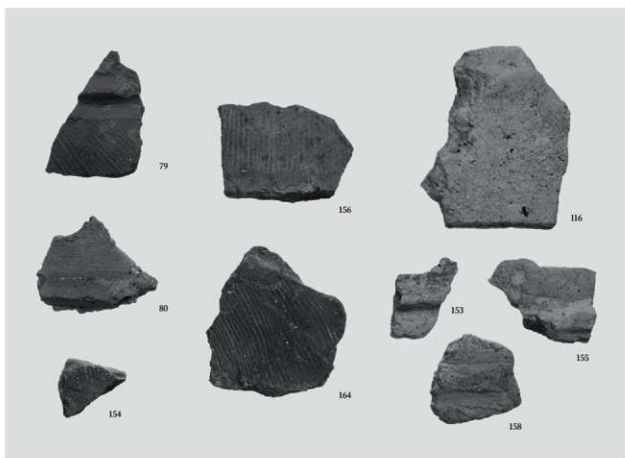
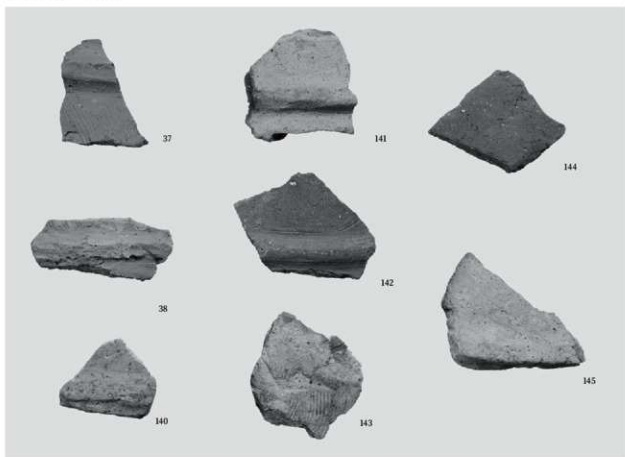








図版 30 遺物





# 報告書抄録

ふりがな	なしのきもといせき						
書名	梨木元遺跡						
副書名	京阪本線（寝屋川市・枚方市）連続立体交差事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書						
巻次数							
シリーズ名	公益財団法人大阪府文化財センター 調査報告書						
シリーズ番号	第332集						
編著者名	森本 徹						
編集機関	公益財団法人大阪府文化財センター						
所在地	〒590-0105 大阪府堺市南区竹城台3丁目21番4号 TEL.072-299-8791						
発行年月日	2024年8月30日						
ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード		緯度・経度	調査期間	調査面積	調査原因
		市町村	遺跡 番号				
梨木元遺跡	大阪府寝屋川市 香里本通町	27214		北緯 34°46'41" 東経 135°37'54"	令和4年9月1日 ～ 令和5年3月17日 ・ 令和6年2月1日 ～ 令和6年3月19日	946㎡	京阪本線（寝屋川市・枚方市）連続立体交差事業
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項		
梨木元遺跡	墳墓	古墳時代 (5世紀)	溝（古墳周囲の一部か）	須恵器・韓式系土器	墳丘の大部分を削平された一辺11m程度の方墳の可能性		
	集落	鎌倉時代 (13世紀)	溝・柱穴・土坑	土師器・須恵器・黒色土器・瓦器・瓦質土器・青磁・白磁・陶器・石鍋・磁石・瓦	丘陵末端部の微高地上に形成された集落		
要約	<p>枚方丘陵から派生する尾根の先端が、淀川の氾濫原である低地域に接する付近にあたる調査地で、埋没する微高地とその周囲の谷地形を検出した。微高地上では鎌倉時代後半の遺物を伴う遺構を検出し、瓦器機や土師器皿、輸入陶磁器といった当該期の集落に一般的な食器類が出土した。小規模な集落域の一部と考えられる。また、谷を埋積する砂礫層の上面で方形に巡る溝の一部を検出し、須恵器有蓋高坏がまとまって出土した。墳丘の大部分を削平された一辺11m程度の方墳と推定できる。1基のみの確認にとどまるが、5世紀後半に形成された初期群集墳の可能性が高い。</p> <p>谷の堆積層からは埴輪、奈良時代の土器、瓦などが出土し、丘陵上部における土地利用の一端を示唆するものと考えられる。</p>						

公益財団法人 大阪府文化財センター調査報告書 第332集

## 梨木元遺跡

京阪本線（寝屋川市・枚方市）連続立体交差事業に伴う  
埋蔵文化財発掘調査報告書

発行年月日 / 2024年8月30日

編集・発行 / 公益財団法人 大阪府文化財センター  
大阪府堺市南区竹城台3丁目21番4号

印刷・製本 / 株式会社 明新社  
奈良市南京終町3丁目464番地